

第7回 子どもの未来をひらく教育改革会議議事概要

日 時 平成20年5月13日(火) 14:00～16:50

場 所 小倉リーセントホテル 2階 玄海の間

出席者

(委員) 池田繁美委員、池田正昭委員、井上美奈子委員、岡本エミ子委員、香月きょう子委員、加藤信夫委員、久保哲哉委員、久米村京子委員、杉本松廣委員、鈴木澄男委員、谷美紀委員、田原憲二委員、恒吉紀寿委員、中川博子委員、中村雄美子委員、仁保一正委員、沼田文子委員、福原かすみ委員、藤岡佐規子委員、堀川英樹委員、彌登章委員、元兼正浩委員

麻田千穂子副市長

(事務局) 教育長、子ども家庭局長、教育次長、教育委員会総務部長、教育委員会学務部長、教育委員会指導部長、教育委員会生涯学習部長、子ども家庭局子ども家庭部長、子ども家庭局子育て・健全育成担当部長ほか

会議次第

1 開会

2 議事

(1) 「教育日本一」を実感できる北九州市の教育のあり方について

(2) 教員がより力を発揮し教育に専念できるあり方について

(3) 子どもの学力、体力、特性を伸ばす学校教育のあり方について

～専科教育や小中連携等一貫的教育について～

3 事務連絡

4 閉会

配布資料

資料1 : 「教育日本一」を実感できる北九州市の教育のあり方について

資料1-1 : 久保委員 発表資料

資料1-2 : 池田(繁)委員 発表資料

資料2-1 : 杉本委員 発表資料

資料2-2 : 池田(正)委員 発表資料

資料3 : 子どもの学力、体力、特性を伸ばす学校教育のあり方について

～専科教育や小中連携等一貫的教育について～

資料4 : 第6回会議で出された主な意見(学校と地域との連携のあり方について)

参考 : 子どもの未来をひらく教育改革会議委員名簿

1 開会

事務局： それでは定刻となりましたので、第7回子どもの未来をひらく教育改革会議を始めさせていただきます。

まず、会議に入ります前に、お手元の配布資料の確認をさせていただきたいと思います。

まず、本日の次第でございます。

次が、資料1、「教育日本一を実感できる北九州市の教育のあり方について」でございます。ホッチキス留めでA4版、5枚ものでございます。

次が資料1-1、久保委員の発表資料になります。A4版、1枚ものでございます。

次が資料1-2、池田繁美委員の発表資料になります。A4版、1枚ものでございます。

次が資料2-1、杉本委員の発表資料になります。A4版、3枚ものでございます。

次が資料2-2、池田正昭委員の発表資料になります。A4版、3枚ものでございます。

その次が資料3、「子どもの学力、体力、特性を伸ばす学校教育のあり方について」で、A4版、2枚ものでございます。

次が資料の3-1、「品川区の小中一貫教育の考え方」でございます。A4版、3枚ものでございます。

次が資料3-2で、A4版、1枚もので福岡市の取り組みについての新聞記事のコピーでございます。

次が資料3-3で、A4版、1枚もの、「平成19年度 政令市における小学校専科指導の実施状況」でございます。

次が資料4、「第6回会議で出された主な意見」でございます。2枚ものでございます。

それと後ほどご紹介いたしますが、委員の変更等がっておりますので新しい委員名簿をお配りしております。

以上、よろしいでしょうか。会議途中でも、落丁等ございましたら、お届けしたいと思いますので、よろしく願いいたします。

次に、4月1日付で人事異動に伴い、事務局の変更がございましたので、主な職員のご紹介をいたします。

・ 事務局及び副市長紹介

教育長以下事務局異動者及び麻田副市長の出席の紹介

事務局： それでは、事務局を代表いたしまして柏木教育長がご挨拶申し上げます。

事務局（教育長）

皆さま、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました、4月より教育長を拝命しました柏木でございます。今後とも皆さまのご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いしたいと思います。

さて、委員の皆さまには昨年度から本市教育の進むべき方向性につきまして、

幅広い視点から活発なご議論をいただき、また、3月には特別支援教育につきまして、中間の報告をいただきました。本当にありがとうございます。

私自身としては、昨年10月、この会議が発足した当時は、子ども家庭局長の職でございまして、ある意味では、子ども支援の立場からですけれども、事務局としての一翼を担わせていただいております。本市の子どもたちにつきましては、学力、それから体力の調査結果が全国平均に比べて低くなっております。また、少年犯罪による検挙、それから補導数が深刻な状況にいたり、多くの課題をかかえております。

また、平成19年度の市民の意識調査を見ますと、学校教育の充実に対する市民の要望は5位と、高い状況でございますけれども、その取り組みに対する評価は残念ながら31位と低くなっております。これも市民の学校教育に対する期待の高さの表れであると思っております。この結果は謙虚に受け止めていく必要があると、我々も感じております。教育委員会といたしましても、関係部局と連携を図りつつ、教育日本一、子育て日本一のまちづくりのために尽力をし、課題を一つひとつ乗り越えながら市民の皆さまの期待に応え、また、今後とも評価をしていただけるような取り組みを、ぜひしていきたいなというふうに考えております。

今年度は、本市の子どもの教育に関する課題に対して、提言をまとめていただくことになっております。委員の皆さま方には、会議等に貴重な時間を割いていただくこととなりますけれども、皆さまには格別のお力添えをいただけることを、期待を申し上げて、簡単でございますけれども開会にあたってのご挨拶とさせていただきます。

本日はよろしく申し上げます。

事務局： 次に、委員の変更のお知らせがございます。前任の宇城輝耀委員に代わりまして、福岡県私学協会北九州支部長の西村義詮氏に、委員に就任をいただいております。本日、西村委員はご公務の関係でご欠席をされておりますが、西村委員につきましては、学校法人鎮西敬愛学園の理事長もされております。ご紹介させていただきます。

なお、本日の会議でございますが、委員25名中22名の出席のご連絡をいただいておりますが、2名、委員の方が遅れているようでございます。現在20名の出席をいただいておりますので、過半数に達しておりますので、設置要綱第5条第2項の規定により、会議が成立しておりますことを申し添えます。

それでは、座長、お願いいたします。

2 議事

座長： 只今より、「第7回子どもの未来をひらく教育改革会議」を開会いたします。議事については、お手元の次第にありますけれども、1つ目が、「教育日本一」を実感できる北九州市の教育のあり方について。2つ目、「教員がより力を発揮し教育に専念できるあり方について」。3つ目、「子どもの学力、体力、特性を伸ばす学校教育のあり方について」。この3つを予定しております。

また、今回の委員意見発表については、議題2、「教員がより力を発揮し教育に専念できるあり方について」に関連して、杉本委員と池田委員をお願いしてあり

ます。

また、第6回で議論しました「学校と地域との連携のあり方」について、会議で出された主な意見を資料4にまとめてあります。意見をまとめるにあたり、前回と同様、「学校」「地域・社会」などの観点から整理をしています。最終提言を検討する際の資料となるようにしたいというふうに考えています。

それでは、1つ目の議事に入っていきたいというふうに思います。議題1、「教育日本一」を実感できる北九州市の教育のあり方について」は、これまでのテーマ設定と異なって、総論的な部分にかかるテーマというふうになります。

これまでの会議では、まず「特別支援教育」だとか「家庭との連携や基本的な生活習慣の向上方策について」など、具体的、個別的なテーマを設定して議論し、その中から総論的部分をまとめていくという方向で議論を進めてまいりました。

個別のテーマはこれからも並行して議論していくことにはなりますが、一方で、今後は最終提言に向けて、これまで出てきた議論を踏まえつつ、北九州市の教育のあるべき姿、目指すべき姿という全体の議論も進めていく必要があると考えてテーマ設定をしたところです。前回の会議の際も、検討していただければということをお願いしましたが、今回、少し皆さま方の意見を聞きたいというふうに思っています。

北九州市では、「教育日本一」のまちづくりを目指すとされています。この会議でも、北九州市の教育のあるべき姿をまとめていくにあたって、どうすれば教育日本一を実感できるか。また、何をもちょう教育日本一というのか。他都市との比較からとらえるのか、市民や子どもの意識など主観的な側面からとらえるのかといった点は、非常に重要なテーマになるかというふうに思っています。

議論の進め方としては、今回は、まず各委員から「教育日本一」についての意見を1人当たり2分程度で発表していただく形をとりたいというふうに思っています。そして、次回以降、今回出された意見を整理しながら、最終提言に向けて「教育日本一を実感できる北九州市の教育のあり方」のイメージを取りまとめていきたいというふうに思っています。

本日も事務局が資料を用意しておりますので、事務局説明に続き、委員の意見発表をそれぞれ2分以内、お願いいたします。具体的な議論に入りたいというふうに思っています。

それでは、資料1、「教育日本一」を実感できる北九州市の教育のあり方について」の説明を事務局からお願いいたします。

事務局： 説明いたします。申し訳ありません、座って説明をさせていただきます。

資料の1、「教育日本一」を実感できる北九州市の教育のあり方について」をご覧ください。

本市では、「子育て日本一」と並んで「教育日本一」を目指したまちづくりを推進しているところでございます。ただ、「教育日本一」と申し上げましても、教育に対する市民の意識はさまざまございまして、後ほどの資料でもご説明をいたしますけれども、平成19年度の市民意識調査においても、「子どもの教育にとってどのようなことが大切か」という設問に対しまして、「心の教育」、「基本的な生活習慣の修得」、「いじめや不登校問題の解決」、「基礎学力の定着」など、幅広い項目に期待があることが伺えます。

一方で、市政評価における教育に関する項目として、例えば「学校教育の充実」

の評価は、36項目中31位と低い状況にあるのが現状でございます。このような状況の中で、どうすれば市民の方々が教育日本一を実感できるか、今後の北九州市の教育のあり方を検討するにあたって、何をもちょう教育日本一ととらえるかという点が今回のテーマ設定の趣旨でございます。

それでは、資料1の説明に入らせていただきます。資料1の全体構成は、まず、「1.本市教育の状況を示す指標」として、本市教育の状況を全国、あるいは政令市との比較で示したものを、6つの視点に沿ってまとめてあります。また、「2.学校教育にかかる意識を示す指標」には、保護者や地域の方々の学校教育への参画状況や児童生徒の学校生活への意識を示す指標をまとめてあります。

具体的な項目につきまして、簡単にポイントを説明いたします。

(1)「確かな学力と体力」のうちの、学力でございます。平成19年度全国学力・学習状況調査と観点別到達度学力検査の結果を挙げております。

全国学力・学習状況調査については、小学校6年生と中学校3年生を調査対象として、国語、算数、数学の調査が実施されております。A問題は、主に「基礎的な知識や技能」に関する問題、B問題は「知識や技能の活用」に関する問題となっております。例えば、小学校6年生では、本市の国語のA問題の平均正答率は80.6%で全国の平均正答率81.7%と比較して、1.1ポイント。B問題では59%で全国との比較では3ポイント下回っているという状況になってございます。平均正答率について、全国との比較を行った場合、どの学年・教科もほぼ同程度といえるものの、いずれの学年・教科とも全国平均正答率を若干下回っている状況となっております。

観点別到達度学力検査につきましては、小学校2年生、4年生、中学校1年生と2年生を対象として、国語、算数、数学、英語の検査が実施されております。例えば、平成19年度の小学校2年生では、国語の得点率が79.6%と全国平均を0.1ポイント上回り、算数が88%と全国平均を0.1ポイント上回っているという状況でございます。小学校1年、中学校1年、中学校2年はいずれの教科も全国平均を下回っておりますが、小学校4年、中学校1年につきましては、平成18年度との調査の比較では全国平均との差が縮まっております。一方で、中学校2年の得点率につきましては、18年度に比べ、全国平均との差が拡大しているという状況となっております。

2ページをお願いいたします。体力につきましては、新体力テストの結果を挙げております。

平成18年度の調査結果では、小学校では、握力や上体起こしなど8種目につきまして、6学年分・男女別に分けました96項目のうち、全国平均を上回るものが32項目。中学校では9種目、3学年分男女別にした54項目のうち、全国平均を上回るものが2項目となっております。

次に生活習慣につきましては、平成19年度全国学力・学習状況調査の結果から、「学校の授業時間以外の学習時間」、「読書時間」、「朝食を食べる習慣」、「起床・就寝時間」の結果を挙げています。このうち、「平日における学習時間」では、1日当たりの学習時間が1時間以上と答えた小学生の児童の割合が、42.8%と全国平均を15.1ポイント下回っており、中学校の生徒では55.4%と、全国平均を9.6ポイント下回っております。

3ページに移りまして、「読書時間」、「朝食を食べる習慣」、「午前7時前に起きる児童生徒の割合」などでも本市の児童生徒の状況が、全国平均を下回っているという

状況になっております。

(2) の、「子どもの特性を伸ばす」の項目では、別表に英語指導にあたる A L T 講師の配置数や、主に少人数学習指導や専科指導などにあたっている市費負担講師の政令市比較を挙げております。

申し訳ございません、資料 1 の最後、10 ページをご覧ください。

本市の市費負担講師は、平成 19 年 5 月現在で、135 名、A L T の配置数は 39 名となっております。各都市、学校数や活動内容の違いもありますので、単純な比較はできませんけれども、市費負担講師の配置につきまして、京都市が 334 名、名古屋市が 413 名と多い状況になっております。

3 ページのほうにお戻りください。(3) の「学校の力をさらに高める」項目では、「教員一人あたりの児童・生徒数」を挙げております。本市の場合、小学校では、20.8 人、中学校では 16.5 人となっており、基本的な教員定数は全国的な基準がございますので、大きな差はございませんけれども、京都市は小学校で 18.5 人、中学校で 14.5 人となっております。

4 ページをお願いいたします。(4) 「学校や地域の教育活動を市民の力で支える」の項目では、平成 19 年度の全国学力・学習状況調査の結果から、「児童生徒の地域の行事への参加」「児童生徒の学校以外での清掃活動への参加」の状況を挙げております。このうち、「児童生徒の地域の行事への参加」の状況では、地域行事に「参加している」「どちらかと言えば参加している」と答えた児童生徒の割合が、小学校で 46.8%、全国平均を 15.2 ポイント下回っており、中学校では 25.3% と全国平均を 12.2 ポイント下回っております。

(5) 「心の育ちの推進(青少年の健全育成)」の項目では、4 ページから 6 ページに、「不登校児童生徒数」「いじめの発生件数」「児童生徒による暴力行為の発生件数」「北九州市内の少年非行の状況」「大都市における少年犯罪検挙補導状況」を挙げております。このうち、4 ページにあります「不登校児童生徒数」の状況では、平成 18 年度の不登校者の割合を見ますと小学校では 0.1%、中学校では 2.24% と全国との比較では少ない状況になっております。

6 ページをご覧ください。「シンナー等乱用少年の検挙・補導人員」につきましては、平成 18 年度は、120 人が検挙・補導されており、数としては年々減少しておりますが、県に占める割合が 35.2% と依然として高い状況となっております。

7 ページをお願いいたします。(6) 「特別支援教育の拡充」の項目では、旧の養護学校でございますが「特別支援学校の設置数」「特別支援学校の教員数」を挙げております。本市の場合、市立の特別支援学校の設置数は 9 校、教員数は 511 人となっております。

その下をご覧くださいと思います。「2 . 学校教育にかかる意識を示す指標」には、全国や他都市との比較ではなく、学校教育に関する主体である保護者や市民、児童生徒の意識や参画状況を示す指標をまとめております。冒頭でも申し上げましたが、平成 19 年度の市民意識調査の子どもの教育に関する要望では、「心の教育」は 66.3% と 3 人に 2 人までが挙げており、期待が高くなっております。次いで、「基本的な生活習慣の修得」「いじめや不登校問題の解決」が 37.4%、「基礎学力の定着」が 31.6% の順となっております。幅広い項目に期待がある状況となっております。

8 ページをお願いいたします。一番下の表になりますが、「児童生徒の学校生活に対する意識」のうち、学校で「楽しみにしている活動がある」「どちらかとい

えばある」と答えた児童生徒の割合は、小学校で88.9%、中学校で71.3%となっており、小学校では全国平均を0.2%上回っている状況となっております。

個別の指標に関する説明は、以上の通りでございます。

9ページをお願いいたします。検討の視点といたしまして、「教育日本一」を念頭においたときに、ご説明しましたような指標や現状の数値がある中で、どうすれば教育日本一を実感できるのか。また、何をもちて教育日本一を捉えるのか。他都市との比較優位で日本一を目指すべきか。将来的に目指すべき姿を実現する過程や意識などをもつて日本一を捉えることはできないか、といった視点で検討していただければと思います。それとまた、今回、福井委員のほうから「教育日本一」の資料を送付いただいておりますけれども、次回以降、出席した際にご発表いただくということでご了解をいただいております。

以上で事務局からの説明を終わります。

座長： ありがとうございます。それでは、引き続き各委員から「教育日本一」についての意見発表をお願いしたいというふうに思っています。座席順でお願いしたいと思っておりますので、順番に2分ずつでお願いしたいと思います。

委員： それでは発表させていただきます。今回、教育日本一ということはどうとらえるか、ということを経議にかけるということで、周りのお母さん方に「教育日本一」ということで、どういったイメージを持つかということをお聞いてみました。

比較的低学年のお母さん、お父さん方に聞いた場合は、やはり基本的な学力だとか体力、それから先ほどの数値のところのことを、イメージをされる。それから、子どもたちが学校を楽しみにしているかどうかということが、教育日本一だなあと感じるということでした。

もっと高学年のお母さん方に聞いた場合は、何て言うのですか、学力については、やはり、結構学習塾などに通っていらっしゃる比率が高くなっていくので、学力よりもやはり学校生活をどのように過ごせるかという、何かしらの問題があった時に、先生がどう対応してくださるか。コミュニケーションがどうとれるか、保護者同士、先生と保護者ということをお、どんなふうにお先生が取り組んでくださるか、先生が1人で抱え込まないかということが、大きいというふうにお感じるということでした。

それから、支援のことは検討いたしましたけれども、何かしらの支援を必要としている方からお聞きますと、やはり選択肢がどれだけたくさんあるかとか、きめ細やかな対応がしていただけるかどうか。それから相談しやすい体制であるかどうか。そして、その相談をしていくときに、段階を踏むのが面倒くさくないかどうかということがポイントになるというふうにお聞いてまいりました。

ですので、やはりそういった低学年だとか、高学年だとか、支援を必要とするというところで、必ずしも同じようなことではないのだなと、私、今回、さまざまの方に聞いて感じました。ですので、そういったことを項目別に目標を掲げられたらいいなというふうにお感じしています。

以上です。

委員： 子育て日本一、教育日本一、いろいろ言われていますけれども、公立幼稚園が、今、取り組んでいるところは、保護者と一緒になって基本的な生活習慣をきちんと

と身に付けていくと、いろいろな子どもの豊かさも、またそこから伸びるのではないかという話し合いを、前年度いたしました。

それはPTAの全国大会を福岡県がした時に、お母さん方全員、北九州で集まってもらって、今、何に取り組んでいたら子どもたちが本当に健康にすくすくと伸びるのかということ話し合った時に、ちょうど福岡県のテーマが「早寝・早起き・朝ご飯」運動があったのですけれども、ある程度同じ言葉で、みんなで言い合っていないと、バラバラのことを言っても、お母さん方、思いは同じだけ何をしたいかわからないということで、「早寝・早起き・朝ご飯」をテーマにそれぞれの幼稚園、それぞれの保護者が、自分の園では、それから自分の家庭では何に力を入れて取り組んでいこうかという話し合いをしていきました。

それで、公立幼稚園は、今、8園あるのですが、8園それぞれのお母さん方が、今、自分たちの園で一番必要なことというところを考え合って、食育に力を入れる。だから朝ご飯をきちんと食べて出すにはどうしたらいいとか、それがきちんと身に付くためにどうするか。みんなで、お母さんと子どもが頑張れたことに対して、シールを貼っていたら子どもの励みになるとか、方法や手だてをそれぞれの園で考えながら、「早寝・早起き・朝ご飯」を合い言葉に、基本的な生活習慣を身に付けようというところに取り組んでいきました。

今、地域の中学校、小学校といろいろな話し合いの場があるのですが、やはり基本的な生活習慣の乱れというのが定着をしていないというところが、大きな課題になっています。だから、幼児期からきちんとそこを身に付けていくことで、子どもたちの自立の芽が育っていくのではないか。お母さん方も、保護者の方もそこに一生懸命目を向けることで、子どもの育ちをきちんと見届けることができるのではないかとこのところ、公立幼稚園全体、それから、これを福岡県に持ち込んで、福岡県の国公立幼稚園の保護者全体で取り組みまして、全国大会で発表をいたしました。

うちの園では体づくりということで、「親子ほっとタイム」という時間を作って、おうちの方と帰る前20分、一緒に運動したり、ゲームをしたり、一緒に親子で体を動かして、運動することは楽しいな、運動するとおなかすくから、おうちに帰ったりした時にご飯を食べるとおいしく食べられる。おいしく食べると夜はぐっすり眠られる。ぐっすり眠られると朝が早く起きられるという、そういうサイクルを作ろうということで、小倉幼稚園は取り組んで来たのですが、それぞれの8園の幼稚園がそれぞれの思いを持って、「早寝・早起き・朝ご飯」ということをしましたが、北九州も何かそういうスローガンみたいなものをきちんと持ってすると、それに向かって、では幼稚園はどうしたらいいか、保育所はどうしたらいいか、小学校はどうしたらいいか、というふうになるのではないかなと考えているところです。

委員： 私が「教育日本一」と考えたときに、企業の立場から言いますと、北九州は今、かなりいい環境にあるのではないかなということを思っています。

というのは、九州全体がカーアイランドという形で自動車産業がどんどん発展していくというのがありますし、一方、中国とか東南アジアの発展に伴って、国内ではもう非常に飽和状態なので、弊社も中国とか東南アジアに海外拠点を持って、やはりそういったところはビジネスのチャンスがあって、そういったところの所得が富裕層というのが、今度日本に観光旅行に来たり、また、日本でビジネ

スをやるうとしたときに、どうしても九州というのは一番表玄関になるわけなのです。その時に、福岡とか北九州というのは、ロケーション的に非常に恵まれていまして、だからもう、東京のほうに目を向けなくて、これからどんどん中国とか東南アジアの国々と交流を図っていくことによって、いろいろな可能性が広がってくると思います。

それを考えたときに、うちの会社もそうなのですが、うちの会社とかもう、九州出身者というのは誰もいないんですよ。TOTOという会社自体が日本全国の会社というか、まあ世界のTOTOというブランドになってしまったので、結局、九州出身者がいない。九州の人がTOTOには入れないという時代になってきています。でもこれは、本当は好ましいことではなくて、本当は九州出身者にTOTOを大きくして行ってほしいというのがあるのです。

そういった意味では今、TOTOに誇りを持つとかいったところで、インナーブランドという戦略をやっているのですけれども、結局、そのブランドの価値を上げていくということによって、社員がブランド価値を上げることによって、TOTOがもっといい会社になるという戦略なのですけれど、そういったことを、「北九州っ子」というのをちゃんと作って、北九州に誇りを持った北九州の子たちをどう定義して、その子たちに東南アジアとか中国と、福岡とか北九州の交流の先駆けになっていただくような人をどんどん作っていきたい。

そういった意味では、北九州の子とかをどんどん中国とか東南アジアと交流をして、北九州の個性のある21世紀の子どもたちを、22世紀につながるような、そういったことを何か打ち出せたら非常にいいのではないかと。

間違いなく、これからは日本を向いた子育てとか教育だけではすまなくなって、恐らくこれから一緒にビジネスをするのは日本人ではないと思うのです。中国の方とか東南アジアの方だと思うのです。そういったことでいくと、そういったことを念頭に置いた教育のあり方というのをぜひ少し議論をして、先駆けて北九州はそういったもので、何かこう策を打っていくといったことで、何か考えていただければと思います。

以上です。

委員：先ほど、説明の中に、北九州市の特別支援学校の設置が9校ということで、結構設置率としては高いのですが、障害種に限りがありまして5障害のうちの知的と病弱と肢体不自由というものに限られております。では、目の不自由な方、耳の不自由な方に関してはということになると、県のほうに依存しているような形になっておりますので、この辺を取り込んだ全ての障害のある方の教育という問題を、もう一回考えていかないといけないのではないかなというふうに思っております。

それと、障害者の福祉に関しましては、北九州市はかなり具体的な取り組みが進んでいると思っております。それと同様に教育に関しても、もっともっと具体的な取り組みをしていく必要があるのではないかなと思います。特に、今、激動の特別支援教育ですし、知的障害の特別支援学校の生徒数が非常に増加しておりますので、それについて行けていない施設だとか、人だとか、そういう問題がたくさんあります。在籍している子どもたちへの適切な指導と必要な支援というふうに言われるのですが、どうも必要な支援のほうが出てしまっていて、適切な指導というのが影を潜めているみたいな感じになっておりますので、もっとその

適切な指導を行っていく中で、信頼される学校づくりをしていかないといけないというふうに考えております。

そのためには、やはりもっともっと、教員の問題だとか、施設設備の問題だとかその辺も含めた、ただ単に人だけの問題というような形に考えるのではなくて、いろいろな面からもう一度、今あるものを考え直していかないといけないのではないか。新たに特別支援教育という新たなものになりましたので、それに適合できるような内容にしていかないといけないのではないかなというふうに思っております。

以上です。

委員： 日本一を目指すということの意味については、僕はいいことだと思いますし、日本一を取るには本当に真剣に努力しないと日本一にはなれない。偶然、何か、国語の点数は1番だったということはあるかも知れませんが、努力して日本一を取るという形で何かテーマを決めて、それに向かって全市あげて頑張っていくというの、市をまとめていく一つの方法ではないかなと思います。その中でやはり、我々のふるさと北九州、そして故郷を愛する子どもたちを、その目標に向かって頑張った中で愛することができるような子どもたちにしていきたいなと、そういうふうに思います。

今度、日銀総裁に白川さんがなられましたけれど、これは地元出身ですよ。日本一といったら日本一でしょう。銀行のトップですから。非常にそういう意味では誇りですよ。そういうふうに思いました。

僕は「ニッポン」という読み方をするのか、「ニホン」と言うのか、意外と自分自身こだわります。僕は「ジャパン」というのは「ニッポン」ということだと思いますので、できたら「ニホン」と言わずに「ニッポン」と読んでほしいなと、そういうことを思います。

それと、やはり日本一を目指すというのは本当に努力しないと駄目なんですよ。日本一を目指すということはいろいろな意味で非常に難しい。すべてを、いろいろなことを制御しながらそれに向かって努力していくということは、ほんとに難しいことなのです。偶然だったということはないです。

それともう一つは、この比較対照の部分で国語とか英語とか、点数が出てきますよね。これで日本一を目指していくということであれば、非常に分かりやすいのですけれども、そのときに、日本一の中でどこと対抗するのかということになると、これはちょっと競争心をあおるみたいな形で非常にいいことではないかも知れませんが、東京23区、そして政令都市17都市、その中トップなのか、全国のトップなのか。やはり、その辺のところの目標を明確にして努力していったら日本一になるということになれば、非常に価値のあることだと思います。

先ほども言いましたように、偶然なるよりも何か一つ、あれもこれもではなくて何か一つ、自慢できる子育ての方法を、日本一を目指していきたいなというふうなことを思いました。

以上です。

委員： 私は学科とかいろいろな問題で、日本一ということとは、まず心の問題からちょっと追求してみたいなと思っているわけです。

去年、貝塚という所にまいりまして電車に乗りました。まず一車両、女子学生

が足を広げて全部座っていて年寄りがみんな立っているんですね。それで、これは何だと。それで私は、誰も怒る大人はいない。中心人物に一喝したんです。それで、北九州はこんなことはないだろうなと思ひまして、先月、門司港までたまたま行くことがありまして汽車に乗った。ちょうど下校時。まず高校生やら何かでしよう、恐らく。席を譲る人は誰もいないんですね。

いくら学科、勉強ができて、心の豊かさがなかったら、年寄りを大事にしなかったらいけない。心がないんですよ。これは戦後教育の弊害でしょう、GHQの。自己主義でやっているから。皆さん、自分たちさえ良かったらいいというような感じ。だから、日本一というと、まず心を作る。不登校の生徒をゼロにしていくと。どうして不登校になったかと。我々の時は、先生は大体54名、終戦後で児童が多かったから、それで1人でやってらっしゃった。それは何かと云ったら、厳しく指導してくれるから、それでまかなっていったんですが、今、見ましたら北九州は、中学校で16.5ですか。このくらいの生徒を預かっている教師は、もう少し不登校うんぬんの問題よりも、一生懸命になっていただきたい。そうしたら、おのずから心は豊かになり、勉強も学科も、いろいろなものも、いわゆる日本一はおろか世界一になるのではなからうかと思っております。道徳が足らんということですね。

終わります。

委員： 私も、教育とは一体何だろうと。広義の教育と狭義の教育というのがあると思うのですけれども、これがまず何か、明らかにする必要があるのではないかというふうに思っています。

それから、大正14年、大正から昭和の初期に変わる時の先行きが見えない大変革の時に、日本のフレーベルと言われる倉橋惣三先生は、現代社会はいかなる人を求めているかということで、「神経が強靱で疲れず、自己の信念に従って初心が貫ける人間」というふうにお書きになっているんですね。そしてこういう子どもがどういう場で育つかと云ったら、大自然の中に放牧しろと。今、放牧できる状態ではないです。しかも北九州の今度の学童クラブの方針というのが、クラブまでに行く距離が危ないから、安全であるために学校内に今後学童クラブを作ると。その辺の、何か過保護に過ぎるのではないかと。これで果たして自己の信念が貫ける、初心が貫ける人間が育つのだろうかというふうに思っていますので、その方法についてももう少し考えなければいけないし、今、堀川さんがおっしゃったように、いくら競争して学力の点数が上がっても、知識を注入するだけでは駄目なのではないかと。だから教育というのは何だろうと、いつも思うのですけれども。

今度、何か読解力が14位で一番低かったというふうに伺っているのですが、この読解力というのも文字が読めて解することができるということではなくて、相手の気持ちが読めるということも含めて読解力というふうに言われているのですが、この、人の心が読めない、人間が信じられない。こういう中でさまざまな問題が起こっているとしたら、やはり子どもたちが本当に人間を信じる心をまず育てていくことが大事だろうし、生活習慣にしても指示待ち症候群ではなくて、自分で目標を立てられる、そしてそこに向かってチャレンジする、その意欲というのはやはり周辺の大人たちから愛されて認められる、そこからスタートするのではないかというふうに思っています。

そこがすべての基盤であると思っているのですけれども、何か掛け声をかけて、

それに対処する子どもというのでは、日本一はとても目指せないと思いますし、日本一と言うよりも、やはり現代社会はいかなる人を求めているかというところに、まずそこに焦点をあてる必要があるのではないかと考えています。以上です。

委員： 10年ほど前に、北九州の前の市長の肝いりで、北九州に市立の灘高校みたいな中高一貫を作りたいということで、北九州市立の中高一貫の会議をやっていた時の議論とちょっと似ていまして、その時もやはりどういう人材を目指すか、北九州に還元される学力の問題とか、東アジアを意識した問題とか、かなり同じようなことをやっていました。志を持った人材づくりということで答申を出したのですけれども、その後どう使われたかちょっとよく分からないままに、今、至っているわけです。

今日、日本一ということで、例えば学力とか体力の厳しい現状を知らされましたが、秋田県が今、学力テストの結果が良かったということで、日本のフィンランドだということで注目されているようですけれども、では秋田の県民がほんとうに満足しているのか。

つまり、学力とか体力というのは、先ほどご意見ありましたように、かなり個人的な問題で、平均点が高い、低いというのは市町村にとってはすごく大事なのですけれども、保護者にとっては必ずしもそうでもなく、わが子のほうがむしろ気になるわけです。平均点が低かったら、もしかしたらわが子はもっと別の所だったかもしれないのではないかとというぐらいのことはあっても、むしろ関心事というのは、やはり親の願いというのは、むしろ子どもたちが安心して楽しく学校に通えるとか、そういう中で自立する力を身に付けてもらいたいという、そういう手を適切に差し伸べてもらいたいという願いであって、そういう意味では「教育日本一」というよりは、やはり「教育環境日本一」という、教育の内的事項というよりは外的事項ですね。条件整備で、北九州で子育てしたくなる、やはり北九州に住みたくなるというそういうふうな視点が必要なのではないかなと思います。

そうしたときに、繰り返し申ししているように、北九州市というのはちょっと政令指定都市で非常に大きな都市なので、その北九州市という枠がやはり難しいんだと思うのです。先ほどの中高一貫の時でも、北九州市内全域から通える学校をどう作るかとか、常にバランス感覚。とくに5市合併の歴史があったものですから、どうしてもそういうバランス感覚がこの間ずっと働いてきたと思うのですけれども、むしろ、もう40年過ぎて、そういうふうなバランス感覚よりは、むしろ北九州市内の分権、そういうコミュニティということで、やはりふるさととかそういうことを実感するまちづくりというふうに教育環境のエリアを少し足元に据える必要があるのではないかと考えています。

私は八幡の人間でしたけれども、やはりなかなか小倉とか門司とかには行かなかったんですね。ですから、やはり北九州はそれぞれの所にそれぞれの独自の文化の色合いですね。学校区も違えば、政治、選挙区も違うし、かなり分かれているところがあると思いますので、そういうことを逆に、むしろもう思い切って分権化というか、そういうことをしていく必要があるのではないかと考えています。

そうすると、例えば前回のコミュニティスクールのように中学校区程度の単位の所に、例えば予算とか財源とかそういうことを下ろして、それぞれの所が知恵を出し合ったり、力を発揮し合うような、なかなかやはり住んでいる実感が沸か

なくて、北九州市役所が遠いというようなそういうふうな中で、やはり自分たちの声が届くようなそういうフットワークとネットワークができるような、そういう所で子育て環境と教育環境日本一を目指していただきたいなと、そういうふうに思っております。

以上です。

委員： 先日の別の改革会議の時に1人の先生が言われたのが、日本一と付けたばかりにこれが難しくなったということを言われておりましたが、確かにこの「日本一」というのを付けるがばかりにほんとに大変なことであろうかと思えます。

以前の市長の時は、3つの日本一の1つが「子育てしやすいまち、日本一」ということであったことかと思えます。そうしたところからも教育日本一の中に、この子育てしやすいまちというのも含まれることであろうかと思えます。ただし、この日本一と付けるからには、ほんとに日本一を目指さないといけないということですから、これは市あげて取り組まないといけない。ということであれば、対外的に子育て宣言、教育日本一宣言というようなことをやるぐらいの本気で取り組まないといけないのではないかなと思えます。

これまでも、幾つかの委員会に参加して、教育について、あるいは幼児教育についての会議を持たせていただいたのですが、やはり行き着くところは親の問題、親の教育に関する関心の問題。新しい教育基本法でも親が子どもの教育に第一義的責任を持つということでもありますから、この親をどうするかということが、やはり一番の問題となろうかと思えます。

そうしたときに、いつも委員会ではチラシを作ろうとか、親に読んでもらおうとか、あるいは講座を増やそう、研修会をやりましょうということになるのですが、そのチラシを読む親はいいんです。研修会に参加する親はいいんです。参加しない親をどう気が付かせるかというのが問題になろうかと思うのです。

そうしたときに、いかに気が付かせるかといことになると、やはりテレビを使ったりという、マスメディアを使っての何か、ことをやらないといけないのではないかなと思えます。そういったときに、小さな、短い子育てのCMとか、教育に関するCMを常々流すとか、そうしたときには資金的な問題が起こってくるわけですが、そこには企業のご協力をいただくとか。今、オリンピックを前にして「がんばれ、ニッポン、応援しています」といって企業名でコマーシャルをされる。ああいったように「子育て日本一、協力企業、何々」というようなCMのできるのではないかなというようなことが考えられます。

市を挙げてやらないことには日本一にはなれない。家庭、地域、学校、企業、そして行政が一つとなって、この目標に向かって進まなければ、この日本一子育てはできないのではないかなと思っております。

委員： 資料の1-2のペーパーに、書いておりますので、これを読みながらお話をしたいと思えます。資料の1-2、「人格教育（徳育）を重視した教育日本一を目指す」といったものを書いております。

教育の目的というものを教育基本法に示してありますように、社会に役立つ人間づくりと、すなわち人格形成ということになっております。この人格形成というのは学力と体力と徳力、この3つの要素をバランスよく備えることである。ところが現在の教育では、学力・体力に比較しまして、徳力がおろそかになってい

ると思います。

徳力の意義というのは、学力と体力を正しい方向に向かわせるために徳力があるわけで、この徳力無くして、学力・体力を正しく生かすことができないと思っております。その徳力を育てるものを徳育と言いまして、この徳育というのは思いやりの心を養うということ、そのように定義しております。

その思いやりというのは周囲の人に不快さを与えない、そして安心と喜びを与える、こういった思いやりの心が徳力であると、こういうふうに定義しております。思いやりはどの人にといい、まず人に対して思いやりがなければなりません。それから人の集まりである社会に対して思いやりがなければならぬ。我々を生かしておる大自然に対して思いやりがなければならぬと。

人に対しては礼儀・節度を中心として指導することによって、人間関係やコミュニケーション能力が良好になります。現代の社会問題はいじめ、ひきこもり、自殺、うつ病と。これは徳育が十分でない結果だと思っております。それから社会に対しては、やはり公共性、あるいは規範意識というものを十分に指導していく。大自然に対しては環境保全ということを指導しまして、温暖化や資源枯渇、こういった問題が分かるようになる。

そういうふうに、私は、徳育というものを日本一にしていきたいと考えております。そのためには、まず教師養成校を設立しなければならないのではないかと提案したいと思うのです。この教師養成校というのは、まず教師としての資質を備えるため、自らが人格、徳性を磨いて、子どもへの教育、主に徳育の指導法を習得する場とする。特に新任の教師はいきなり現場に行くのではなくて、この教師養成校を経て教育現場へ赴任することが望ましいと思います。

今日の先ほどの資料1の7ページに「学校教育にかかる意識を示す指標」ということで、これからの子どもたちの教育にとって、どのようなことが特に大切と思うかということで、上位3つ、心の教育と基本的な生活の習慣、いじめや不登校の問題の解決、これはすべて徳育の問題です。ですから、やはり徳育の問題、重要性というものを感じております。

以上です。

委員： 教育日本一と言われて、前回から宿題をいただいていたので、ずっと何か日本一の話が頭から離れなかったのですけれど、私、一保護者として中学校にかかわっておりまして、中学校のPTAでほとんど毎日のように学校に行くことがあるのです。だから子どもたちの姿を、今、一番見ることが多くて、やはりその大きな「教育日本一」と言われても、もう、とても大きなことだなあと思ったら、まず自分の目の前にいる子どもたちのことが一番なので、まずは足元のことが一番気になるのです。

子どもたちは挨拶ができない。身なりはきちっと……ズボンが下がって、ずり落ちるような格好で学校に来ていたりとか、髪の毛の色が変わっていたりとか、本当に現場の子どもたちの姿の目の当たりにして、もうそのことが一番、まずは変えていかなければいけないことなので、保護者としては、今、目の前にいる子どもたちのことをどうしたらいいかということが、一番気になっております。授業にしても、子どもたちが騒いで授業にならないとか、中学校でもそういうことがあるんですね。だから、先生たちも一生懸命やっていますといつも言われます。でも、学校の先生たちも、一生懸命やっていますと言われるけれど、保護者に「こ

うなんですよ、あなんですよ」と現状をお話いただけないんですね。結構、学校だけということが多いのです。

それを考えたら、やはり学校も保護者も地域も一緒になって、同じ問題をかかえていかないと、そこだけ、そこだけとなるとどうしても連携がとれないし、子どもたちのことがやっていけないのではないかなと。とにかく私は、今いる、目の前の子どもたちのことが一番なので、ここからいろいろなことにつながっていくのではないかなと思っています。

また、北九州市は「子どもを育てる10か条」というものを作っております。その中で北九州市PTA協議会もですし、いろいろな単Pのお母さんたちもですけど、この10か条をいろいろなことがある度に唱和をしております。これはとてもいい10か条なんですけれど、ほとんど基本的なことなんです。挨拶が「朝は明るく笑顔でおはよう」とか、「家族にもありがとうございます」とか、10か条ありますけど、これ、とても今からまだまだ広めていけたらいいのではないかなと、これはほんとにいい10か条ではないかなと思っています。こういうことも教育日本一の1つかなと思っています。

委員： 私自身の個人的な考えとしては、教育日本一として分かりやすいというのは、やはり学力を伸ばすということではないかなと思っています。ただ北九州の学力の状況など、先ほども説明がありましたけれども、やはりM字型学力になりつつある。上位と下位の子どもたちが出てきていると、そういった下位集団の学力保障がやはり深刻な課題としての対応が求められていると思っています。

しかし、単なる試験で測定だけの学力だけを重視した改革では、やはり本質をついていないというふうには考えていますので、以下のように私は考えています。

学力については、学力全国一を目指すということになれば、受験学力と理解されたり、あるいは受験学力への指導とされたりする可能性も高いですし、あるいは「国連子どもの権利委員会」の総括所見で、日本に対して、学校制度の過度に競争的性質の是正ということを求められているということなどを踏まえて、学力というものをどういうふう考えていかないといけないのかということ、北九州なりに検討していく必要があるのではないかなと思っています。

市民意識調査でも市民の心の教育に関する期待が高いということ、それから先ほども意見が出ましたけれども、国際的な、あるいはグローバル社会へ対応できるというような力を子どもたちに付けるということを考えると、子どもたちが自ら課題を見つけ、探求し、意見交換してより良い方向を見出していく、自分の意見を表明し、他者の意見にも耳を傾けると、そういったことがやはり人格完成を目指すための基本ではないかというふうに思っています。ですから勉強することではなくて、子どもたちが学ぶことを大切とするような、そういった教育方法の転換、あるいは徹底が必要だというふうに考えています。

そのため、測定された学力という、結果重視ではなくて、子どもたちにどういう力を付けるのか、子どもたちの可能性を引き出す仕組みとしての教育、すなわち学びを通したエンパワーメントとしての学力という意味での日本一を目指すことが必要であるというふうに考えています。

ただ、日本一を標榜するにあたっては、比較可能なものだけではなく、ほかでは取り組まれていないユニークな、あるいは個性的な取り組みが必要だというふうに考えています。北九州方式というふうに呼ばれたり、あるいはほかの自治体

からの教育の視察とか、フォームとなるような、ほかでやっていない特徴的な取り組み。あるいは北九州の子どもたちが転校した際に、北九州でやっていたの、これ、ほかの所では何もやらないんだなというような、変わった取り組みも必要になるのかなと思っています。

例えばの話ですけれども、3学期制ではなくて、あるいは2学期制でもなくて、1学期制にするとか、あえて複式だとか小中合同授業のカリキュラムを作っていくとか、あるいは45分ではなく90分授業で組んでみるとか、授業日数は多いけれども平日の終業時間が早いとか、そういった思い切った取り組みがなされると、教育日本一を目指して本格的な、いろいろな試行錯誤も含めて、取り組みが行われているというふう実感できると思っています。

ほかにも例えば0学年と言われているように、海外ではあつたりしますけれども、慣らし期間を導入をしたり、そういったユニークな個性的な取り組みということも考えていく必要があるのかなと思っています。

それから、現在の学校については今日の後半の議題となるかと思えますけれども、学級王国とか、あるいは教科王国というふうに比喻されたりするような批判もあつたりします。担任や教員の責任と権限を明確化し、評価制度によって資質向上を期待するというようなあり方よりも、やはりチーム主導體制でいろいろなかわり方や方法を刺激し合えるような、そういった教職員の集団づくり、あるいはゆとりの確保だとか、身近な大人として教員が子どもたちにいろいろな影響を与えていけるというような、教員もゆとりや子どもの教育に専念できるような体制づくりということを検討していく必要があるのではないかなというふうに思っています。その上で、子どもたちをクラス単位で見る少人数級というよりも、より少人数で学ぶことをベースとしながら、内容に応じて、15人だとか、あるいは60人とか、柔軟に編成を変えながら指導する、柔軟な指導体制がもっと工夫されてもいいのではないかなと思っています。

それから、子どもの成長だけは当然、学校だけではありませんし、また教育は学校教育だけではありません。教育日本一ということを考えるというためには、学校教育の日本一だとかいうだけではなくて、家庭教育や社会教育も含めた生涯教育日本一として考える必要があるのではないかなと思っています。子どもから大人まで、そして学校だけではなく、さまざまな市内の資源、リソースを活用した教育を実施していくような仕組みということが求められているというふうに思っています。それこそ、大都市の特徴を出せるのではないかなと思っています。

北九州は都市型公民館発祥の地というようなことでもありますし、旧5市の社会教育や学校教育などのさまざまな取り組みということをベースにしています。また、現在、文化や環境にも力を取り入れていますし、今回の市民の総合計画などでも、東アジアなども意識されてきています。

そういったことも踏まえながら、子どもが学校に通って幸せであるとか、先ほどの意見でも出ましたけれども、あるいは楽しく学校生活を行っているとか、あるいは子どもも大人も学習、文化、スポーツ活動への参加が高いといった、そういった参加の割合が全国一であるというような目標を据えて、それを達成させるというのが一番いいのではないかなと思っています。

子どもを真ん中に据えながら、子どもだけでなく大人も学び、市民が生涯にわたって人格の完成を目指すことが保障できる、そういった教育に向けて、あるいは市民が一丸となって一人ひとりを支えるような関係を多様に、あるいは多くの

選択肢、機会がたくさんあるというようなことを目指して、教育の日本一ということを考えていったらいいのではないかなと思っています。

委員： 私は、やはり日本一と言ったら、北九州に子どもたちが住んで良かったなということが一番実感できるということではないかなと思うのですが、私自身の実感なのですが、これは反対の実感なので少し言いにくいのですが、北九州に住んでいて、私は父の転勤の関係で千葉に引っ越したのですね。それで小学校6年生の時だったのですが、その時に千葉に転校して一番感じたのが、給食がすごくおいしいということと、それから、その後中学に行ったのですが、中学で専門部活動みたいのがあって、私は報道部というところに所属したのですが、何もかも子どもたちに任せて主体的にやらせてくれたのです。「こんなことまで私たちが決めて実行していいの」というか、学校づくりを実感できるというか、そういう2つの体験がありました。

その時に、子ども心に、教育というのは政治とか行政とか、そういうことと関係するのだと。自分が生きていくということと、そういう政治とか行政とのかわりというのを小学校6年生の時に実感しまして、そのことが今の自分自身の活動への参画とか、そういうふうなものに結び付いているのではないかと私自身の体験で思っているの、やはり、子どもたち自身が本当に北九州で学校に行けて良かったと思える、実感を持ってもらうというのが一番大事なのではないかなと思っています。

もう1つあるのが、やはりそういうことと関連するのですけれども、心の問題がやはり今一番問題になっていて、私たちも活動の中で、本当に子どもたちがすごく苦しんでいるなということを実感します。やはり、この心の問題といった時に、スポーツとか道徳とかいうふうな形で心を鍛えるというふうになりがちなのですが、私は、体も基礎体力が必要なように心にも基礎体力が必要だと思うのですね。心の基礎体力をたっぷり付けるということが、とても大事ではないかなと思います。そういう意味では、文化・芸術の果たす役割はとても大きくて、やはり、心を耕すということにつながると思うし、また、子どもたちの成長・発達に必要なと言われていた3つの間、仲間・空間・時間、この3つの間が今はもう本当に脅かされていて、子どもたちが活動したいと思ってもなかなか場所がない、決められた時間内でしか活動できないとかいうことで、とてもそのことが脅かされていると思うのですね。だから、そういうことを大人としては拡充していくということがすごく大切ではないかなと思います。

それともう1つは、今、格差社会というふうに言われていて、教育も均等に受ける権利が保障されていない子どもたちが生まれている中で、やはり北九州はそうやってはいけないかなと思っています。誰もが豊かな教育を実感できるということは、やはり、そこが一番、北九州に住んで良かったと実感できることではないかなというふうに思うので、そのことはベースとしてとても大事なのではないかなと思います。

先ほどのお話の中にも少人数の話があったのですが、フィンランドが世界一の学力というところでは、やはり、徹底的な少人数とか、子どもの意欲を引き出すとか、そういうふうな教育をされているので、子どもたちが本当に学ぶというか、学ぶというのは、本当は苦しいことではなくて、自分の知識が広がって楽しいことなのだと思える、そういう教育を目指していくということが大切なのでは

ないかなと思っています。

委員： 私も、日本一ということで、目指すものが、いろんな調査結果の数値をとらえて目指すものではないと思っています。

例えば、先ほどから資料1の分について、いろいろ、説明がありましたが、他府県、他都市との比較でとられていくと、ある意味、違う方向に行くのではないだろうか。例えば、学力の問題もありますが、2ページの学習時間においても小・中、全国平均より少ないと言うけれども、中学校で3時間以上というのがこれ1.63倍ぐらいあるわけですね。この数は少ないけれども、これだと絶対数の人数はどうなのか。そこまで見ないといけないと思うのです。だから、この数字だけでいくとおかしくなってしまう。

もっとおかしいと思うのは、不登校の児童生徒が0.1%と全国での0.33、これも絶対数が違うわけですね。また、シンナー補導件数。北九州は補導の件数が日本一、日本一と、いつも言われますね。ところが、現実のところ、北九州市管内の警察署が捕らえた補導の件数であって、実際、捕らえた子どもたちは北九州市在住なのか、他都市在住なのか、ここまで調べてないわけです。はっきり言うと、他都市のほうが多いはず。たまたま小倉南北の主要な駅や折尾駅に来て検挙されている。ところが、市内在住の子どもたちはこれほどの数はなっていないはずだと。ところが、検挙数が警察管内から提示されると、どうしても北九州市は多いようになる。

ただ、そういう環境にあるということは知らなきゃいけない。だから、検挙の数が多から、北九州市は非常にシンナーにまみれているというのではなくて、やはり、子どもたちが有職・無職合わせて青少年がそういうのに毒されているかどうか、もっと深く見ないといけないのではないかと考えております。

私は、学校現場におりますので、もっともっと「ヒト、モノ、カネ」をつぎ込んでいただきたい。

やはり、例えば資料3-3ですか、兼務のことが載っております。そこに書いてあると思いますが、これも北九州は兼務をやっています。ところがこれも、今、ここ教職員課の方がおられますけれども、非常にだましでございます。

以前、私の学校で技術家庭科が1名ずつおりましたので、隣の学校がいなくて行ってと。ところが、技術家庭科の先生は非常に持ち授業時数が少ないので、どうしても学校の内部の中の操作では教科担任プラス学級担任もしなきゃならない。学級担任をするということは、道徳、特活、必ずもう自分の授業の時間に数えていかなければならないのですが、その時間も合わせて隣の学校、わずか5分、10分かからず行くにしても、家庭科の先生は当然、調理実習等々をやるということになりますので、2時間の授業であっても、朝もう朝礼にいらなくて、その学校に行って帰ってくるのは昼過ぎです。食事が終わったところです。そのぐらい、前後の時間が要するという。そうすると、なかなか非常に難しい。

ところが今度、うちの学校では、たまたま学級数の定数が低くなりましたので家庭科の先生がいなくなりました。2名いたときは「行け、行け」と言って出しましたけど、今度は「ください」と言ったら、どこも来ません。ということは、近くにそういうような先生がいなくて来ないのですよ。それで、教職員課はこうやって、「小学校にも兼務で行っていますよ。中学校の家庭科教員がいなくて行っています。」数字は出すけれども、現実にはそういうところの数字だけで見

てごまかしているというようなことがある。

もっともっと、先ほどから他の委員さんが言われているように、少し私とニュアンスが違うのかも分かりませんが、やはり教育、学校現場の教育環境をまず整えていただきたい。どうしても教育となると、私が以前から言っているように教育イコールすべて学校というイメージが強すぎるのですが、どうしてもそここのところに、マンパワーで非常に頑張っているところが、なかなか見えにくく、伝わらない。

先日、中学校給食のモデル事業実施校に食育推進会議のメンバーの方や議員の方が視察に行かれました。そして、「中学校の校長会が反対するように、いろんな問題は何も起こってないじゃないか」というアンケートの結果が出てきました。教師は見えないところで頑張っているのです。そのままの状態で作らせると、生徒指導上の問題とかいろいろ出てくる。それは1つのことが、いろんな教科の授業だったり、学校行事だったり、個人との、子どもと先生との関係が続いていきますので、ある程度頑張って見えないところでやっているわけですけども、そういうところは視察に来られても見えない。「きちっとやっているじゃないか。他郡市のように、うちでもやれるんじゃないか」と言われますけれども、4校にモデル事業を行うだけで施設等々合わせて3億円も4億円もかけるならば、もっともっと「ヒト・モノ・カネ」を効果的に使っていただきたい。文科省は、子どもと向き合う時間の確保のための施策を出しましたが、もっと現場の教師がある程度、ゆっくり余裕を持って子どもたちと接しながら授業ができることを目指していたらと思っております。

そういう中で、教科の授業を通しながら、私は、先ほどから皆さんが言われているように、心の教育もこれも事実だろうと。やはり、私自身が学校教育ですっとやっている言葉で、伝え言葉ではなくて職員にいつも言っていることは、「当たり前前を当たり前前のできる子を育てなさい」と。これは簡単なようですが非常に難しいのです。最近では、4年目になりますと、生徒会の会長までがこれを言います。朝、きちっと挨拶をする。授業の初めと終わりの挨拶をする。先ほど言われたように、茶髪であるとか、ミニスカートであるとか、そういう、服装の乱れとか挨拶しないところ、はっきり言って、うちの学校ではいけません。できたら、うちの学校に皆さん、どうぞ、いつでもいいですから、飛び込みでもいいですから、学校視察に来ていただきたい。うちの学校はきちっと普段やれています。これは胸張って言えますが、そのくらいことを、やはり教師と子ども、また、保護者との人間関係がうまくいけば、そここのところはやっていけるのではないかと思っております。

会津の什教育であるとか、薩摩の郷中というような中に、要するにいろいろなものがありますが、「ならんものはならん」というような内容とか、「ひきょうなことをするな」とか「うそをつくな」等。やはり、ずっとこの元を正せば「心の教育」につながってくるのではないかと、私は思っております。

以上です。

委員：皆さんの意見をいろいろきかせていただきながら「そうですね。」と感激しております。「早寝・早起き、朝ご飯」本当にそうです。それから障害児を受け入れられる。それから日本一、本当に努力しないとできないと思うのですね。それから、何をさておき、子育てしやすいまちになるということ。それから、やはり生涯教

育が日本一になるということ。本当にそうだと思います。それで今、おっしゃったように思いやりの心ですね、そこら辺がとても大事ななと思うのですね。

それで私の思いなのですが、教育というのは、するのは人なのです。大人がするのですね。その一番大事なところが大人だと私は思っています。それで、まず教育する人として、保育園だったら保育士、幼稚園は幼稚園教諭、小学校は教師ですね、その人たちが、まず生き生きとできるということですね。生き生きとできる職場であるということ。そのためには、具体的にどういうことかといったら、ここの資料1-2にも書いていただいたように、大人の、要するに教育する側にいじめがなく、うつ病にならない。大人のいじめもよく言われています。教員のいじめもよく言われています。それから、引きこもりがない、自殺がない。そういう、まず大人がそういうふうなことになるので生き生きと働ける職場になるということですね。それが本当に一番かな。

それで、大人が生き生きと働いていたら思いやりができると思うのですね。それで、不登校の子どももうまく受け入れられる。ということは不登校のない学校ですね。それから、非行児もうまく受け入れられる、非行児のいない学校。それから障害児もうまく受け入れられるという、今言っているインクルーシブな、そういういろいろな多様性をうまく取り入れられる、そういう教育ができるようになると、今度は子どもたちが生き生きとして、子どもたちがいろいろな場面で意欲的に勉強もできるようになると思うのですね。

だから、ここで表を出していただいていますけれども、私は徳育という言葉はあまり好きではなかったのですが、内容は全くその通りだと思うのですね。まず、思いやりが大人の側にある。そういう社会をつくるというのが私は一番だと思っています。その結果として子どもたちの意欲ができるし、それから学力も本当に日本一になると思うのですね。いくら上から教えて「数学1番になれ」「国語が1番になれ」と、「もうちょっと勉強せえ、勉強せえ」と言ったら、子どもは勉強しないと思うのですね。

だから、やはり大人の姿を見て子どもは学ぶと思います。口で言うよりも、まずそういう姿を見せるということが一番大事ではないのかなと思っています。今、よく、カウンセリング教育とか、カウンセリング保育と言われています。そういうカウンセリング教育を、人に対する思いやり、共感を持てる、そういうのが、もう一番の基本になる。これが最も基本的なところです。これがまずできて、そして初めて次の意欲、日本一、いろいろなことができると思っています。

委員： 教育日本一ということですが、小学校教育のレベルからお話しをさせていただきますと、基本的に、自分の学校に、子どもたちが、保護者が、市民の方々が誇りを持てる、好きだと、自信が持てるというような学校をつくっていくことかなと思っています。

そういう意味で、まず1つ目は特色ある学校づくりの推進と充実ということもあるかなと思います。現在、道徳教育、先ほどから出ております徳育というところですが、現在の小学校では、今、西区の浅川小学校とか、あるいは西区の同じ穴生小学校とか。特に穴生小学校は全国大会を10月に予定しています。つまり、道徳教育のあり方ということで全国に発信しようとしておりますし、体育についても、東区の高見小学校は7月でしたか、これも全国に体育教育のあり方ということで大会を予定し、発信しようとしています。今、私、熊西小学校の校長に命

じられましたが、熊西小学校では理科や生活科のあり方ということで、同じく 10 月 10 日に日本初等理科教育研究会の全国大会を予定しています。

このように、それぞれの学校の良さ、特徴、実践等々を市内外に発信することが、この日本一につながっていくし、また、子ども、保護者、地域市民の方々が誇りに思う学校づくりにつながっていくのかなと思っております。

それから 2 つ目ですが、やはり、日本一を目指す上では学力の定着向上も必要だろうと。北九州では素晴らしいよと言っても、学力が低いんじゃないかと言われるたら、やはり変であろうと。この学力を日本一にする必要はないと思うのですが、やはり、今、若干下回っているところをアップしていく、私たちの日々の努力ということも必要ではないかなというふうに考えております。

以上です。

委員： 私の考えの中としては、子育て日本一ということは、それぞれが、その子自身が一生生きていける力を十分に身に付けることだろうと思います。力というと、思いやりとか、知識とか、技術とか、精神力とか、知恵とか、そういったことを、一生を生きていく上に十分な力を身に付けるように支援することだろうと、私の中では思っております。

そういうことで、私は、やはり就学前の子育てが最も大事だろうと考えております。資料 1 を見せていただきましたけれども、何をもって学力・体力の低下というのかは、はっきりは分かりませんが、全国平均よりは劣っているという判断をせざるを得ないような結果になっております。知力・体力を伸ばすにも、やはり、心の育ちというのが非常に重要なことだと。精神力がないと何もやはり頑張れませんし、体力がないと、また、頑張れません。

それで神経系のシナプスの発達からいたしますと、大体、今の考え方としては、いっぱい、すごく発達していく。1 歳ぐらいまでにブワッと発達して、あと、淘汰していく。必要なものだけ残していくというふうな考え方になってきております。どうも、それは本当のようです。その時に、淘汰するに当たって適切な刺激がないと、正しくというか、望ましいようには淘汰されていかないだろうということが考えられております。それで、この時期に、やはり家庭力というのが非常に大事だろうと思います。この時期というのは、やはり就学前ですので、お母さんとかお父さんとか、そういった方が身近にいるということが非常に重要なことなのではなからうかと、私自身は思っております。

それで、これをサポートするには、やはり企業なり行政なりの協力がないと絶対できません。企業のほうにも理解を求めようとしていかないと、責任者なり経営者なりに理解を求めないと、こういったことは決してできないだろうと私は考えております。やはり忙しすぎると思いますね。子育てをする時間が、3 間がないと言われていましたけれども、それはもう、子どもだけに限らず親もそうだと。子どもとじっくり向き合える時間がない。これはやはり企業のほうに、フレックスタイムとかを十分に考えていただかないと、子どもを愛そうと思っても余裕がないと愛せません。かわいいとも思えません。やはり、子どもと十分に接触できる時間を確保していただきたいと思います。

子どもは大人のまねをして発達するのです。それだけはもう大人が責任持って行動しないと、子どもはいい子には絶対育たないだろうと、私自身、思っています。

運動等も、できればストレス発散等に効果はありますので、やはり、体力の低下といいますけど、やはり、運動しないと体力なんか発達しないですね。ですから、そういったことも考え合わせて、やはり学力も大事ですし、体力も大事ですし、思いやりの心も大事ですので、バランス良く発達できるような環境を整えてあげることも1つの方法ではないかなと考えております。

以上です。

委員： 私がちょっと思いましたのは、この目指すべき姿をやはりみんなで、子どもから大人まで、みんなが共有することができる、そういうやさしい目標みたいなのができたらいいかなと思います。そういうことを共有することは言うまでもありませんが、私もこれにありましたように、何をもって日本一ととらえるかというところを、これからもっと具体的にこの場で考えていく必要があるなと思いました。

そして、数値だけではなくて、すべての子どもたちが安心して学べるような教育環境を充実するとか、もう言い尽くされておりますが、家庭、学校、地域、それから企業、それぞれが本当にそれぞれの役割を果たせるような環境の整備、それから地域社会全体の教育力が向上するような仕組みづくりとか、そういうところも含めて日本一ということを目指していけたらいいのではないかなと思いました。

簡単ですが、以上です。

委員： 私の提案は、資料にありますように「子育て支援日本一の街 北九州」。説明をさせていただきます。

家庭の教育力の向上、特に生活のリズムづくり。つまり基本的な生活の習慣化の問題です。このテーマは保護者や先生方の最大の悩みでもあります。子どもの生活実態は、家庭においても、学校においても、その土台が崩れかけています。私は、このテーマを抜きにしては教育を語れない、教育の根底、基本だと考えております。このテーマの具体化を、退職した先生方に考えてもらいましょうというのが私の第1の提案です。OB・OGの先生方は、豊かな経験と調査や話し合いの時間が十分にあります。文科省が出している家庭教育資料以上に優れた具体策の提示が可能だと、そう思っております。

第2の提案は、この活動は市教委レベルではなく、市レベル、つまり市民運動として発展させてもらいたい。家庭、学校、地域、三位一体で推進し、しかも、幼児期からの積み上げであれば、必ずこの効果は期待できます。生活のリズムづくりは生きる力の源、エネルギーです。この活動が全市的に進めば、北九州の教育は一変します。まず、子育てが楽しく豊かになります。もちろん学校教育は生徒指導に要する時間と労力が激減し、質の高い教育が全市的に展開されます。市教委では、このテーマを最優先事業と位置付けていますが、緊急の教育課題でもあります。子育ての楽しさや豊かさを追求することが今日的な課題であり、子育て日本一を実感できるテーマと考えます。

以上です。

委員： 北九州市教委の最初の説明で、皆さんにここで考えていただきたいというお話があったのですが、「ああ、北九州市教委としては、でも、教育日本一というのは、

頭がよくて、元気で、体力があってということ、もう決めてらっしゃるんだな」というのが最初の印象でした。

その上で、幾つか資料についてご質問をさせていただきたいのですが、一番最初に学力の、北九州が劣っているという、差があるというお話をなさいましたが、この平均ポイントが劣っているというのは、これは意味のある差なのですか。例えば、誤差の範囲ではないのかとか、いろいろあると思うのですが。これは、そんなに北九州は劣っていて大変だと大騒ぎをしなければいけないような差なのでしょうか。教えていただきたいと思います。

2つ目に、その下に、到達度学力検査。それで、小学生は改善されているということなのですが、これはどういうふうな努力をなさった結果、改善されているのかを教えていただきたいと思います。

同様に、その下の中学校教科得点率、これはどんな手を打ったのか、打たなかったのか。こんなに皆さん、悪い、悪いとおっしゃりながら、放っておかれたのかどうかということを知りたいです。

3ページの読書時間。これは驚異的な数字ですね。市教委の方、この数字を信じていらっしゃいます？ 子どもが、小学生で40%の子どもが30分以上読書をしている。中学校で30%近くの子どもの、30分以上読書しているというのは、とても僕には信じられない数字なのですが、これは本当なのでしょうか。さんに聞いたら、「いや、漫画も含めているのではないですか」ということなので、それだったら有りかなと思うのですが、それも教えていただきたいです。

それと、7ページに、市民意識調査の結果があるのですが、これは、時期はいつあったのでしょうかということをお聞きしたいと思うのです。例えば、心の教育ということでいえば、学校での問題がメディアで大きく取り上げられたようなときには、多分、心の問題、いじめの問題、基本的な生活習慣の問題というのは高いポイントを稼ぐと思うのです。北九州の学力は低いということを言われた場合には、多分、基礎学力の定着というのが高いポイントを稼ぐと思うのです。ですから、どういう時期にこういう調査がなされたのかということを知りたいです。

できますならば、先ほどから彌登委員等が発言されていますけれども、例えば北九州の図書の数、学校の本の数はどんな程度なのか。あるいは司書さんというのは、どういうふうな配置をされていて、それこそ、全国の中でどんな位置にあるのかということも、教えていただきたい。

彌登さんが、白川さんというのが北九州が生んだすごい人なのではないかというふうなお話をされましたけれども、やはりこれは必要だと思うのです。北九州の今までの教育の結果、こんな人がたくさんいますよという、これもぜひ教えていただきたいです。それと、現在、全国レベルのあらゆる分野、スポーツ、芸能、芸術、あらゆる分野で今の子どもたち、こんなすごい子たちがいますよと、これも今の北九州の教育の成果だと思うのです。さらに、これは鈴木さんがおっしゃったのでしょうか。学校でこんな取り組みをしている、ユニークな取り組みをしているということも、これもデータとして出していただきたいと思うのです。

単に学力だけ、体力だけではなくて、教育というのはもっと幅広く僕はとらえるべきではないかというふうに思います。

結論から言いますと、データというのは自分の都合のいいデータでいくらでも集められますので、多分、教育日本一というのは、政治的なスローガンとしては

極めて優秀なスローガンになり得るだろうと思うのですが、実際に徹底に突き詰めていくと、あまり、教育を日本一にするというのはなじまないのではないかと、僕には思います。

委員： たくさんの方が意見を言われたから、重なる部分は省きます。基本的には教育的インフラの整備ということで、委員が言われたことと、私は同感だと感じております。

1つは、調査が出ているのですが、これからは調査だけではなくて、いかに分析して、それを施策に実行していくかということが大事なのかなと。

例えば、ここに調査結果の数字が出ているのですが、北九州市は政令市の中でも300万以下の所得の方が4割いるはずなのです。単純に政令市だけでいうと、非常に低いレベルの生活水準の中で、取りようによっては、このポイント差だけでいけば高いレベルの教育を維持しているのかなと。それをどういう角度で見るとかということで、これからやはり分析と具体的な施策が必要かなと、そういうふうに感じております。

以上です。

委員： 教育日本一ということで、その日本一ということに関しては、中が決めることではなくて、外から評価されて、その外からの評価の結果ということではないかなというふうに、私はとらえております。

日本一ということを実感できない状態になったときには、絵に描いた餅にしかならないので、やはり実感させることというのはほんとに大切なことだと思います。それは、市民の方に多分実感をしていただかないといけないと思うのですが、そのためには先ほどお話があったように、今までと違うとか、ほかと違うということが、多分一番市民の方は実感しやすいのではないかと思います。今、何が行われているかということの的確に知るということも必要だと思います。

日本一というと、やはり学力・体力というところで、先ほどからいろいろお話が出ていますが、私も子を持つ母親としては、少々頭が悪くても、明るくてもむしろ友達がいっぱいいる子ども。マラソンが遅くても、優しくてみんなに好かれる子どもというほうが、本人たちが、子どもたち一人ひとりが生きていくためにはすごく大切なことで、大人である私たちが、子どもたちにこれからしていかなければいけない責任としては、やはり生きる力を育てていくということが一番大切ではないかなというふうに思います。

今、ずっと子育てをしてきて、保育園、小学校、中学校と来たときに、先生と保護者との関係というところで、考えるところがいっぱいあるのですが、学年が上がるにしたがって、親自体も先生から離れて行って、先生との距離とか話の機会というのが減って行って、それによって学校にかかわる熱が冷めてきているというのが、正直なところ、私の現状です。

保育園に通っていたときには、もう毎日のように先生とお話をして子どもの状況を知り、小学校になった途端に、「あ、ちょっと保育園とは違うんだな」というカルチャーショックを親として受けました。今、中学なのですが、中学に至っては全くやりとりがありません。そうすると、なかなか聞きたいことがあっても聞きづらかったりというところで、そういった人間関係というか、先生と保護者との関係ということも、今後考えていったら子どもたちのためには変わっていくも

のがあるのではないかなというふうに思います。
以上です。

座長： ありがとうございます。

今日、結論を出すわけではありませんので、教育日本一ということで、一応皆さん方のどういうふうにかんがえたらいいかという意見をお聞きして、それをベースにしながらかの総論部分をまとめていくという方法が1つと、あとそれぞれの各論、個別のテーマからも全体像をこういうふうにしたらいいいのではないかということこの作業も続けていますので、両方から擦り合わせをしながら北九州の教育日本一、あるいは実感できるというスタッフは一体何なのか。

この我々の会議はとりわけ、「子どもの未来をひらく教育改革会議」という名称になっていますので、子どもたちが自ら未来を開いていくように、未来がだいぶ開かれているというような生き生きするような、学んでいくにしたがって排除されたりやる気を失うというのではなくて、生き生きするような仕組みということをどういうふうにか北九州の中で作っていくのかということが、最終的な方向性になるかと思っておりますので、今日、皆さん方の発言していただいた意見をもとに、一度事務局のほうとも相談をしながら整理をして、改めて時間を取りながら、こういった総論部分についても議論をしていきたいというふうに思っています。

それでは、ちょっと長くなりましたけれども、ここで10分休憩を取って、休憩後2つ目の議題に入っていきたいと思っております。私の手元の時計で40分なので、50分から再開ということで、少し休憩をしたいと思っております。

(休憩)

座長： それでは議事を再開したいと思います。

議題2、「教員がより力を発揮し、教育に専念できるあり方について」です。前回の会議では、教員の現状とあり方に関して、教員を取り巻く現状、特に多忙化の状況であるだとか、教員の活動を支援するための人的措置や支援体制、教員の資質向上にかかわる取り組みなどについて、事務局から説明を行っていただきました。

今回のテーマに関しては、杉本委員と池田委員のほうに意見発表をお願いしております。引き続き、意見発表をお願いしたいと思います。

それでは杉本委員からよろしくお願いいたします。

杉本委員： 資料の2-1、私が書いているこのレポートが裏表含めて3枚なのですが、私は小学校の教員ですので、中学校の場合はこのレポートの中には書いておりません。それと、私はもう現場を離れて4年たっております。この資料は昨年のある小学校の1年間を私なりに調べて、一応表にさせていただきました。表にありますように、ちょっと右と左から矢印があって、教員が今、ペケペケと非常にきつい思いをしているというイメージで私なりにレポートを作らせていただきました。

一応、3点です。1点目は年間行事。2点目は時間割から見た1日のありようです。3番目は教科担任を含めて出張がどういう形であるかということで、いわゆる教師が子どもと向き合う時間が実際問題どうなっているのかということで書

かせていただいております。

1枚目は一番最後のまとめということで、進め方は裏側のほうからいかせてください。

一応、学校現場を知っていただくということで、年間行事を書いています。縦が1年から6年までです。横が4月から3月、年度のサイクルを書いております。一応、入学式から家庭訪問、検診含めて、重なるところは1年から6年までトータルしていますし、その学年特有なのは、その学年ポジションで書かせていただいております。

あと、下のほうに全学年ということで、運動会とか、いわゆるプール、水難訓練ということをやっておりますが、非常に4月当初から学校現場は忙しいということです。例えば、検診、発育測定を含めたら、発育測定、視力検査、聴力検査、それに歯科検査、内科検診、心臓検診、耳鼻科検診、眼科検診ということで、4月、5月、6月と、本当に教員はクラスの中で授業をやる以前にこういう検診に追まわらされているというのが現状です。その後にくるのが、いわゆる教科主任会、あるいは全員研という形です。こういう形で対外的に出ていくことがあるということで、2学期、3学期、こういう行事があるということで知っておいてください。

時間が10分ほどということですので、先に進ませてください。次が、では具体的に時間割がどうなっているのかということで、現在の時間割です。学校によって時制が違いますが、基本的に月曜日から金曜日が縦のライン、横が1年、2年、3年、4年、5年、6年ということで、左側の数字は基本的に終わりの時間を書いております。例えば月曜日でいけば、1年生は5時間、2年生は5時間、3～6年は基本的に6時間だよ。括弧でクラブ・委員会ということは、学校によって違うのですが、例えば1年、2年の先生は6時間目はないのですが、クラブ・委員会が入ると、当然ここに1年、2年の先生は入ってしまうということです。

それでいくと、火曜、水曜、木曜、金曜、見て分かるように、基本的に4時ぐらいまで、学校の先生は子どもと何らかの形で対応をしていっているということです。水曜日、唯一、1年生は4校時ですが、どこの学年も5校時で、ここには基本的に研修会、あるいは職員会議が入るということであります。

その表の右側です。例えば5校時、基本的には3時で終わるのですが、下校指導、いわゆる連絡とかノートのチェック、連絡帳のチェック、そういうことをやると基本的に40分ほどかかって、下校が3時40分ぐらいになってしまう。当然、6校時は3時50分に終わるのですが、下校指導をやると4時半ぐらいまで子どもが残ってしまうということが実態です。

次のページです。先ほど言いました、水曜日だけがどこの学年も5校時で終わって、6校時、7校時が空いているのではないかというイメージなのですが、昨年、私が調べたある学校では、各週の水曜日の使われ方ということで、基本的に4週間水曜日がありますが、4月、5月という形で3月までやると、見ての通り、唯一空いているいわゆる水曜日の時間も何らかの研修やいろいろな講習会、学習参観、いろいろなものが入って、基本的にこの時間も教師が自分の時間として使うことができないというのが実態です。それを見ておいてくださいということです。

次、これは、特別あるいは主任・教科主任全員研修会ということで、基本的には1学期に集中するのですが、そこにあるように教科主任会・全員研が、1学期、2学期・・・、3学期は基本的にあまりないのですが、これだけの研修会があり

ます。これがどういうふうに絡むかということで、その次の表、いわゆるこれは学校運営組織なのですが、この学校は2クラスが基本的なものだったので、すみません、個人名を書くわけにはいきませんので、ABCで担任名を記させていただいております。例えば3年生のEさん、丸が主任ですが、その学校の社会科主任、体育の主任という方で、受けると、先ほどの表に戻りますが、社会科の主任会、体育の主任会には出ていかなければいけないと。それと右側の表に行くのですが、全員研も基本的にはそこら辺に参加している。当然この時間も半日、自分のクラスを空けて出て行かざるを得ないという形が生まれているということです。

これは2クラスなのですが、小さな学校、1クラスになると、例えば3教科くらい主任を引き受けなければいけないということになると、当然、教科主任会に今度は3回出て行かなければいけないということで、出て行く回数も非常に多いということです。

一番最初の表に戻りますが、教職員を取り巻く現状ということで「忙しい日々」。この表だけでは、私の説明だけで学校現場を説明するということは、基本的に無理があります。ただ、先ほど言いましたような観点での一部での評価ということで、忙しい日々ということで、対外、いわゆる出て行く場面が、先ほど言いました主任会、あるいは全員研などの研修会、小さな学校ほど負担が増していくということです。

次に対外行事ということで、陸上記録会、バスケット大会。これは6年、5年なのですが、連音、これは各学校によって学年は決まるようです。図工展、自然教室など、非常に対外行事に時間が取られていく。

あと、新しい、いわゆる施策入ってくると各種研修会、講習会が当然また入ってくるということです。学校からまた誰かが出て行かなければならないというのが、「出て行く」というところの部分です。

「入ってくる」ものということで、各種調査が非常にあります。特にデスクネットが入って、少し厳しい言い方をすると、デスクネットは出す側は非常に楽なのです。「こういう調査をやりますから教えてください」と。以前はいわゆるメール便というのがありまして、委員会からいろいろな資料がきた場合は、1部、あるいはそれなりの相当部数が学校現場用に来て、学校現場は見るという作業から入るのですが、デスクネットに入ってくると誰かが開かなければいけない。当然開く時間が必要になってくる。開いていくと、探す必要がある、探して見つけると今度はプリントアウトしなければいけない。必要な枚数になると増し刷りしなければいけないということで、現場サイドから見ると非常に調査作業が複雑になってきている。

この前、確かNHKの番組だったと思うのですが、唯一生徒の学力調査に参加していない犬山市の特集があったのです。東京の教員がそれを見ているいろいろな感想を述べていたのですが、その時の、学校からどれだけの調査が行われて、どれだけ上げているかということでA4の紙を体育館に並べてみました。私は3分の1ぐらいを占めるのかなと思ったら、結果的には体育館が全部埋まってしまったのです。いわゆる学校現場から調査報告用紙を上げなければいけない枚数がそれぐらいあるということです。非常に調査に対する答えを出していく作業に時間が取られているということです。

配布物、これも学校現場からいうと、私も5年前は1年生を持ったのですが、配布物が非常にあります。委員会だけの配布物ではなくて、国から来る配布物、

県から来る配布物、当然市から来る配布物ですね。それと関連団体から来る配布物ということで、私がちょっとその方に頼んで、一番多い時の配布物一日分取ってちょうだいと言ったら、「あなた、それは4月、5月のときが非常に多いから、今見ても、多いのは多いけど、実態としてはちょっとみんなに分かってもらうのは難しいよ」ということで、はっきり言って非常にあります。配るだけで、十数枚あるときもあります。

それは、学校現場は配布物が、いわゆる家庭数と児童数ということで、枚数を節約するということだと思のですが、お兄ちゃんがいるときはお兄ちゃん、次男、三女がいるという場合は長男に配ります。そうすると下の2人は配りません。それが家庭数です。そうすると高学年になると多いのだけど、低学年になると、家庭数でいくと少なくなるのです。この配布物は児童数全部配って下さい、これは家庭数ですよとなると、配る時に「はい、家庭数の子、手を挙げて下さい」、高学年はすぐ分かるのですが、1年生、2年生は分からないのです。そうすると机を見ながら配っていくというふうになると、ここに書いていますように、配布し、確認するだけで帰りの15分もかかることがあります。

というのは、確認作業がなぜ必要かという、配ってない場合、保護者の横の連絡があって、「うちはもらったよ」「もらってなかったよ」というのは、当然学校にクレームが来るのです。そうするとそういうことを避けるために、「はい、もらった人、手を挙げなさい」という形になると、非常に時間が割かれていくと。そういう意味で配布物が非常に多すぎる、そのことで非常に時間が取られているというのが、「入ってくる」ところの中身です。

校内のほうですが、校内主題研ということがありまして、A研、B研というのがあります。A研は基本的には全学年がかかわる、例えば小学校の場合、各学年1年から6年あるのですが、1年がA研を1つ、2年がA研をやる、そうすると6学年A研をやると、少なくとも全員がそれを見、協議会が当然3時半ぐらいからあると思うのですが、全員参加するのです。そうすると年間6回やるとすると、例えば3時間目に6年1組がA研をやるとすると、全クラスの先生方が参加するので、当然その時間帯はよその学年、よそのクラスは自習です。そういうのが6回続くということですね。

B研というのは、隣接学年です。例えば1・2年、3・4年、5・6年でやりましょうと。それは先ほど言いましたように、全員ではなくて当該学年、隣接学年だけが授業を見、協議会に参加するということです。

ある面ではA研、B研に非常に時間が取られるということも、学校現場の実態かなと。それと市・県・国の研究指定を受けた学校はさらに時間を取られると。教育現場の中では、見方によっていろいろあると思うのですが、それが活性化という方もおられると思いますが、一方では不夜城になってしまうと。いわゆる、国の研究指定、あるいは県の研究指定を受けた場合は、10時、11時までその学校の電灯が消えないという、そういう実態も一方であることは事実です。

あと、新しい案が出るたびに基本研修会が設定されます。不審者、事故に対する登下校指導。不審者が出たよとなると、緊急に集団下校をさせます。そうすると当然、いわゆる放課後予定していたことをカットして、全職員が登下校指導にあたるということです。

あと、児童生徒指導、保護者対応です。例えば、児童生徒指導なんか、最近は朝、子どもが出てこないとなると、当然担任が朝から電話をします。もう1時間

目が始まっているのに保護者と話をし、なかなか上がれないという実態もあります。当然誰かが迎えに行かなければいけない。担任が行くか、誰か空いている先生が行くかというところで、そこで協議が始まります。そういうのが多分、どこの学校も毎朝起こっています。

あと、いわゆるクレームが来たときの保護者対応。ある面では、休み時間とか放課後に来ていただければいいのですが、時間中、1時間目か2時間目も来て対応するということがあって、それに対応をどうするかということで時間を取られるというのが、現状、あります。

そういう中で、真ん中の矢印にいけますが、非常に教師が子どもたちと向かい合う時間がなかなか取れない。一方では、右側ですが、さらにということで、いわゆる教職員の評価制度、免許更新制、学力テスト、こういうものが追い打ちをかけるように学校現場に下りてきています。こういう意味で、教師が非常にぎゅっとされているというイメージで私は作ったのですが、どういう実態になっているかという、その結果、子どもたちの気持ちを聞く時間がなかなか取れない。それと、次が大事だと思うのですが、事前の授業準備の時間が、はっきり言ってなかなか取れません。先ほど、家庭科の先生の例もありましたが、理科の実験1つするにしろ、準備を含めたら、事前の準備というのは非常に時間が要るのです。ところが先ほど説明した、どこまで理解していただけたか分からないのですが、どこで時間が取れるのだろうかというのが学校現場の実態です。

次、採点、ノート点検が丁寧にできにくい。保護者との連絡が丁寧にできない。何回か言われていましたが、学校現場の先生がなかなかこちら側に対して説明がしてもらえないということを言われましたが、そういう問題もあると思うのですが、同時になかなか保護者に対応できない。時間が取れないということも、学校現場の悩みであるということです。教師はやはり、一生懸命だし、保護者と向かい合おうと一生懸命頑張っておられると思います。なかなかこういうことで時間が取れていないということが、一方では言えるのではないかと思います。

あと、通信や資料などの作成時間が取れないということで、結果的には、そのために実態はいわゆる時間外労働ということで、これは昨年度の文科省の資料で、昨年4月から半年かけて実態調査をやりました。教師は月平均34時間の時間外労働をやっていると。昼休み45分休憩が14分しか取れていない。それぐらいの実態の中で教員は一生懸命働いているということです。

そういう意味で、私の資料、一部だけですが、学校現場がどれだけ理解していただけたか分かりませんが、やはり人を増やしていただきたいということと、仕事内容の精選を、学校現場もそうでしょうが、教育行政もぜひやっていただきたいと、そういう視点で、よければ論議していただければということで、この資料を出させていただきました。

以上です。

座長： ありがとうございます。

杉本委員のほうから、時間、教員の実態、年間あるいは月間の、週間の中で時間がなく、多忙というのは一体どういうことを根拠にしてやっているのかということ、小学校の教員の例を出しながら、資料を作って説明をしていただきました。これらも踏まえながら後ほど議論していきたいというふうに思っています。

続きまして、池田委員からも意見発表をお願いしたいと思っておりますので、よろし

くお願いします。

池田（正）委員： 座長のほうから、「教員がより力を発揮し、教育に専念できるあり方について」ということでありましたけれども、教育委員会の方から資料を提出してスピーチをお願いしますと言われて、その点のうちではちょっと企業として回答できないので、企業としてどういった人を求めているのか、そのために企業としてどういう取り組みをしているのかといったところで、ちょっとご案内させていただくということで、事前にお断りしておりますので、そういったことを前提に、ちょっと私の話をお聞きいただければと思います。

こちら、抜粋資料なのですが、これは昨年、一昨年と、5ページのほうに書いていますけれども、社会経済性本部といった所が各企業の人事担当役員に、「人間力とはどういったものなのですか」と、企業が求める人間力というものはどういったものかということで、原稿を寄せてくださいということで、私の上司がこの文章を寄稿しまして、これは2冊目なのですが、大体10社くらいがあってそこに掲載したものです。

実際、原稿は私が書いたのですが、そういったことで、私は、ちょっとこの資料には思い入れがありますけれども、そういったことで少しご紹介したいと思います。

先ほどから、北九州市の教育に対して、生き生きした教育を実現したいということがありましたけれども、私ども企業でもこのタイトルになっているように、社員一人ひとりが生き生きとして働く会社を目指してということを目指してございまして、冒頭書いていますが、TOTOグループでは企業価値（企業としての魅力）を高めていくためには、変化を遂げなければならないし、そのための推進力は、2つの大きな力の合力である。それは、“TOTOらしい企業文化を継承し続けていく力”と“時代に応じて変化していく力”であり、そのためには、『いい会社＝イキイキした人材で溢れる会社』でなければならない。これは、私どもの社長が言っていますけれども、この最後のフレーズですね。いい教育とは、生き生きとした人材で溢れる教育でなければいけない。そこが目指す姿ではないかということで、ちょっとこれを引用させていただきました。

今、実際企業とそこで働く人々というのは、当然契約関係といったことで成り立っておりまして、私どもTOTO経営者とか、私どもコーポレートの管理職は、この会社で働きたいと思われるような会社を実現するために、いろいろな努力をしております。そのために、自己実現の機会の提供とか多様性を認め、活かすといったことに取り組んでおります。

今、TOTOグループは海外含めまして3万人従業員がいますけれども、その中では、海外の社員の方が約1万8,000人で国内が1万2,000人。そのうち、TOTO社員とかグループ会社の社員だけではなくて、その中に派遣社員とか契約社員の方とか、協力企業の方もいらっしゃいます。そういった形でどんどん多様性というのが増えていますし、国籍というのもどんどん多国籍化しております。特に、男女雇用機会均等法以降は、男女の性差なく総合職を採用するという形で進めてございまして、TOTOでも今、新入社員の50%は女性の方を採用するという形でございまして、そういったところに対する機会の拡大といったこともございまして。

一方で、TOTOグループで働く人々は、働き続けてほしいと会社が思われる

人材になってくださいということで、TOTOGグループで働く人たちは何を指すのか明確な意思を持ってください。また、「会社が任せたい」と思われるような実をつけてくださいということで、社員の方々に求めています。

次のページにいていただいて、そういった中、2ページの下の所ですけれども、昨今、企業では“人間力”といったところを非常に重要視しておりまして、人間力とは、能力やスキルなどの単発の能力が高いことではなく、「人間としての総合的な力」や「にじみ出てくるような人間的魅力」といったことで提示されておりまして、「この人なら信頼できる!」「この人なら付いて行きたい!」と思わせるようなものが醸し出される雰囲気、それが人間力ではないかということで、私どもは定義しておりまして、この人間力を発揮するために、私どもは具体的にどのような能力を重視しているかということで、次のページから述べております。

その中で、やはりTOTOGグループとして求めている……これは別にTOTOGに限ったことではないのですけれども、やはり昨今、一番必要になってきているのは「考え抜く力」が1つで、次のページに書いていますけれども、「自己マネジメント力」この2つに関して、私どもTOTOGでは重要視しております。その中で、それぞれ絵でハーバード大学のロバート・カッツ教授の理論で、これは先生方ご存じかと思いますが、カッツ理論ということで非常に有名なのですけれども、コンセプチャルスキル、ヒューマンスキル、テクニカルスキルという形でいくと、トップマネジメントをやろうとすればするほど、コンセプチャルスキル（考え抜く力）というのが求められることとなります。

下の中段にありますけど、「考え抜く力」とは、現状を当たり前と思わず、より良くするための解決方法を考える力のことであり、課題発見力、計画力、創造力といった要素が言われています。こういったものがないと、やはり昨今、商品のライフスタイルとか機能が多様化する中で、お客様のニーズにはとても応えられません。そういったことで、非常に私どもはこういったことを重要視していますし、かつマネジメントとかプロジェクトの仕事をするときには、どうしてもこういったコンセプチャルスキルがないと、チームというのはまとめ上げることができないので、こういったところを企業としては求めているのです。しかし一方で、下のほうに書いてあるように、核家族化とか少子化とかITの発達によって、なかなか人との触れ合いとか物事を考えるという場面が少なくなった状態で企業に入ってくるという実態があります。こういったところを、私どもとしてはどうしたらいいのかというのが、1つの課題と思っています。

次のページにいけますけれども、「自己マネジメント力」でいきますと中段に「企業は人なり」と言いますが、人材（人財）の確保・育成は、企業の原動力そのものであります。当社では、ミドルマネージャー層に求める要件……これはミドルマネージャー層に限ったことではないのですけれども、自己マネジメント力、つまり「責任感」「リーダーシップ」「顧客指向」「現場主義と改革意識」の4つを求めています。この4つは、“人間力”に大きな影響を与えるものだというふうに提示しています。この4つの内容に関しては、ちょっと割愛しますが、下のほうにいきまして、この4つの要件を現場で発揮するには、やる気だけではやはりダメで、「知識」と「知恵」というのが必要になってくると。この「知識」と「知恵」というのが、やはり小学校とか中学校の、そういう小・中等教育の中でどのように、学校教育の中で教えられているのか、植え付けられているのか。こういったところがないと、やはり高度教育を受けて考え抜く力とか、自己マネジ

メント力にはつながっていかないのではないかと考えております。

あとは、もし関心があればちょっと読んでいただきたいのですが、こういった中、私ども、TOTOの今採用の実態と、入社3年目くらいの若手社員の教育をどうやっているかと言いますと、私どもは平成2年入社なんですけれども、バブルのころは非常に雑駁な採用をしていて、正直言って大学の名前で採用していたのです。

ですから、国立大学とか有名私立大学でどんどん人を採っていた。だから、学校教育というのはそういったものにどんどん、いい大学に入れる、いい高校に行く、そして、いい会社に入れるというのが1つのパターンだったのですが、現在はそういった大学名による採用というのができませんので、セクションというを行います。まず、ホームページで皆さん登録していただいて、一次選考があって、その中で非常にいい志望動機を書いた人たちを集めて、どういう能力があるか5回くらいセクションをします。だから、これを、ミーティングをさせて、彼がそういうリーダーシップを持っているのか、非常に傾聴する力、話を聞く力があるのかとか、全体をまとめ上げる力があるのかとか、そういったことをどんどんこなして、TOTOの選考を抜けてくると。

実際、売り手市場と言いますけれども、私どもの企業で、昔みたいに大学の名前で採るということはなくなったので、実際売り手市場と言いながらも、今はなかなか内定は出さないのです。本当に力のある人にだけ来てもらおうとしています。

でもそういう中、どんなことが起こっているかという、これは、この間の、多分、テレビ東京の学生の就職戦線であったんですけど。実はですね、一流企業に入るための予備校みたいなのがいっぱい出ているのです。かつホームページの中でそのノウハウとか伝受するのがありまして、結局、企業と学生のいたちごっこになっていて、企業の内定をもらうための活動が1つのトレーニングをした人が受かるような状況になっている。

ですから、TOTOに入って入社式のあと、1カ月間掛けてそれぞれ営業に行ったり、開発に行くともたさらに1カ月くらい、大体、都合2カ月間研修するのです。総合研修は私ども人事で担当しているのですが、実際入ってから、非常に入ったときの元気さとか、TOTOに入って頑張りますと意欲がある人が少ないのです。

TOTOグループはいろいろな仕事がありますが、デザインをできる人がTOTOは限られているのです。例えば、建築科を出た人が、じゃあ、プレゼンテーションやってくださいとか、設計やってくださいと言ったら、私はデザインをやりたいんですけど、結局入社を拒否するとか、入ってからすぐ辞めるとかいう状態になったりしています。

そういったところでいくと、やはり、非常に何か、安直に自分の人生を考えてはいないのでしょうか、非常に社会人になるまでのトレーニングがうまくされてない人たちが入ってきている、それが1つ。結局、社会適応力、対応力がないということと、考える力がなぜないかという、私の頃はまだインターネットはなかったのですが、今、インターネットとかすべてシステム化されているので、検索したら答えが出てくるのです。だから、プロセスを考える力が弱い。だから、つくり上げていく力が弱くなっているのです。だから、何でもかんでもITを使って、プロセスは分からないけれど、何々といったら答えが出てくる。

こういったことで、非常に考える力が弱くなっているのではないかというのが、私ども企業の人事としては考えています。

ですから、私どもの頃は、結局、職場でのOJT以外の所はあまりなかったのですけれど、やはり現場のほうでそういう人材が育たないということで、OJT、その入社してから3年目計画を現場等に行ってから、徹底してやると。そのために今、教育係をエルダーとかチューターという形で先輩社員を作って徹底してやるといったことを、今、現場と一緒にやっています。

それで、そもそも大学を卒業したときに、PDCAという形でプランを作って、Doですね、実行して、チェックアクションする力がない人が多いので、2年目にはそういったものを外部の講師を呼んでやっていると。

ちゃんと上司が見ていなかったら、部下は今、辞める時代です。だから、今の若い人たちは、これをやってくださいと言ったら完ぺきにやります。だから、一番分かりやすく言うと、この資格を取ってくださいと言ったら取るのです。でも、この仕事のためにあなたは何をしなくてはいけないかと言ったら、何もできないのです。そういった人が非常に増えているので、そういったことに関しては、上司と部下が徹底してコミュニケーションして、あなたが何をやらなくてはいけないというのを自分で考えさせるような上司の教育というものを非常にやっています。

一方で、やはり女性社員が増えてきたのですけれど、女性社員というのはTOTOではどうしても男性の職場、キッチンとかお風呂とかトイレ周りは奥さんが選ぶのですけれど、実際商品開発とか物を売っているのは男性なのです。なぜかという、工務店とか水工店さんは男の社会なのです。だから、女性のセールスがなかなか出られなかった。でも今は、女性のセールスも出さないと、それだけTOTOに女性社員がいっぱい入ってきてても仕事がないのです。それで女性社員を出すと。そうすると、非常に女性社員は、1つの営業所にたった一人、女性がぼつんと配属されている。すると本人がメンタル的にまいって、TOTOを辞めてしまおうとか休職するとか、メンタルの状態になって、非常にこれだけ女性を採用しているのに、戦力化しないままTOTOを辞めてしまおうという事態が出てきていますので、それに対しては、メンタルという形で、そういうチューターとかいろいろな仕事を教える人ではなくて、キャリアとか人生の悩みとかを聞いてくれる人たちを付けていかなければいけないような、ちょっと時代になっているということが、今の企業の現状です。

ですので私の話では、どうしても今の企業の現状を話しているので、今、中心になっている子育てとか、教育等、小・中学校の現場の話とは違いますけれど、そこら辺に手を打っていただいた上で、企業としてどういう人たちを求めていくかといったところで、今後、お話しを進めていくことができればというふうに考えております。

以上です。

座長： 私たち、学校とか教育だとか、そういうのを全部考えてしまいますけれど、そこで育てていく人材とか、あるいは子どもたちの力といったことを考えるときに、今の話なども踏まえて、考えていく必要があるのではないかというふうに思います。

事務局のほうからは、優れた教員を増やし、教員のモチベーションを高めるためにどのような評価を行い、表彰や処遇をどのように行うべきかという観点か

ら、ご意見、ご提案をいただきたいというようなことも訴えられています。優れた教員を増やし、教員のモチベーションを高めるためにどのような評価を行い、表彰や処遇をどのように行うべきか。まあ、学校の現場はなかなか時間が取れないという状況があったり、あるいは企業の中でも、さまざまな仕組みをしているけれども、メンタル面も支えていかなければいけないというような状況も出てきているというような、ご紹介もなされましたけれども、今の説明に関してのご質問、ご意見等あれば、ご自由に出していただければと思います。
よろしくをお願いします。

委員： 学校の先生の定時といたら、おおよそ9時から17時まででしょうか。

杉本委員： 基本的には、8時半から（午後）5時15分です。

委員： （午後）5時15分、そうですか。いや、残業が34時間もなさっているでしょ。ここに書いてありますのでね。8時半から17時15分ですね。

我々の企業は、民間零細企業ですので、私は朝6時に会社に来ます。それから前日した、従業員がやった品物を出荷する前に、全部丹念に事故がないか検査します。それから、うちの従業員、営業のほうは大体ほとんどが20時前に帰ったことがございません。民間企業というのはそれだけ厳しくやらなかったら、すぐ倒産という憂き目にあうのです。

だから学校の先生たちは、まだまだ我々の業界からすれば、うんと時間的に余裕がありますね。少し自分の職業を、僕から言わせていただければ、誇りを持って、こういう不満より、もう少し大きなことの不満を言っていたきたい。

以上です。

杉本委員： 私は民間の個々の、いわゆる就労形態にどうのこうの言うつもりは全くないのですけれども、ただ、分析としてどうあるべきかということで、労働時間の中でどれだけ教育効果を上げていくかという前提があるわけです。だから、基本的に学校教育を8時間労働の中でこれだけの教育効果を上げさせようという、年間通じて、月を通じて、週を通じて、1日を通じてもあると思うのです。その中で、基本的に目的を達成する時に、その時間以外の時間を使わなければならないということに関しては、どう分析するべきかということは、課題として残ると思うのです。だからそういう視点で見たい。

私は、どれだけの時間が必要かどうかということに関しては、基本的にそれぞれの会社の経営がありますから、どうのこうの言うつもりはありません。ただ、先ほど言ったような形で、その決められた中で決められた効果が上がってくるときに、これがそれ以上掛かるのだったら、原因は何なのだろうか。それを取り除くためにはどうすべきかという論議をするのが、この場かなということで、資料として出させていただいているだけです。

以上です。

委員： 教員のアンケートで、目いっぱいであるということをして100人の先生にとったら100人がすごく忙しいということであったと思うのです。恐らく、私の知る限り、教員の方たちはとても忙しいと実感しております。

私は経営コンサルタントの仕事をしておりまして、経営というものに関して、最近では病院経営とか、あるいは介護施設の経営、そういったもののコンサルタントをするのですが、この看護師の仕事とか介護士の仕事というのは、恐らく教員に勝るとも劣らないくらいの忙しさなのです。

しかし今、病院も介護施設も民間ということになりつつありまして、自由競争してきております。その中で、今までのようなやり方をしておりますと、当然、よそとの競争ですから負けてしまう。だから、病院であっても倒産しますし、介護施設であっても倒産すると。こういう事情の中で、私どもに依頼があるのですが、まず、看護師の方、あるいは介護士の方に相談を持ったときに、とても忙しいと、みんな確かに100人聞きますと、いや、暇ですよという人は本当にいないのです。忙しいから、じゃあ、忙しいということ例えば1カ月なら1カ月、3カ月なら3カ月、作業分析をしていただくのです。その作業分析した中で見ると、確かにみんな時間から時間まで、とても忙しくされているのです。

私どもは、そういったものが、今度プロということで、まずその作業時間、書かれたものが本当に今も必要なかどうか。仕事というのはだんだん時代が流れていきまして、昔はとても重要であったけれども、今ではだんだん重要でなくなる。その上にまた新しい仕事を入れますと、当然、忙しくなってくるのですが、そういった作業という仕事というものが今も忙しいのか、必要なかどうかという、そういうことをまず分析するのです。それから、それが専門的な仕事か、そうでない仕事か。専門的であれば、あなたがしないといけないけれども、専門的でなければ、他の人に一般の方にでも任せられるのではないかと。あるいは毎日それを、仕事をしないといけないのか、あるいは1カ月まとめて仕事できるのかとか。その仕事についてはコンピューターで賄うことができるのかとか、そういったことをずっとやっていきますと、私の経験ですけれども、そういう看護師さんや介護士さん、とても忙しいのですけれども、3割くらいは時間も効率化できて、ゆとりができてきた。そういう評価を得るのです。

ですから、恐らく教員のそういう作業時間分析というものが、今、されているかされていないか分かりませんが、そういった作業時間の分析のプロに一度見ていただいて、客観的に評価していただくというのもいいのではないかなと、そういうふうに思っております。

以上です。

委員： それで、私のところは、毎晩8時過ぎまで仕事をしているのですが、会社を作って36年になります。それで、33年よく働くから、やはりトップとしては何らかの報酬を考えていかないといけないということで、33年間、年間3回のボーナスを払っております。税に払うよりもいいですからね、喜ばしたほうが。そのようにして、やはり働いていただいております。だから、先生たちも、もし給料が少なかったら、それなりに働いて、余計に取られるほうを選ばれることを私は希望いたします。

以上です。

委員： 僕は、現場の校長として思っておるのは、以前も言いましたが、子どもと向き合いたいという時間が欲しいのです。私、教師生活36年目になりますが、若い時、30代に担任をしているときは、よく昼休みに子どもと遊んだのです。それから放

課後、「またおいでよ」と言って、よくキャッチボールとかしたのです。ところがその時間が若い職員も、年配の職員も現実取れないのです。そこが一番課題ではないかなと。やはり、先ほど子どもの心と向き合う、そして、子どもの心を耕すというようなことが言われておりますが、やはりそこら辺がないと本物の教育というのはできないのではないかなと。そういう意味での多忙感、というところで聞いていただくと有り難いかなというように思うのです。やはり、子どもと向き合う時間が欲しいというところです。あまりにも雑務が多すぎるのではないかなというところなのです。まあ、雑務だけではありませんけれどですね。以上です。

委員： これはやはり、職種の違いが若干あります。私は、OBですが、私たちが若い頃は、生徒数が50人、60人だったのです。しかし、ものすごくやりやすかったのです。それは親御さんたちも、こっちが厳しく叱る、厳しく叱って連れて行く。

そうすると、また親が厳しく叱ろうとする。もう、しなさんなど。学校でちゃんとしたからと。そういう時代だったのです。

それで、やはり本当に昔は、物はなかったけれど心は豊かだった。今、心の問題が出てきております、まさしくその通りです。今は学級の人数は少ないけれども、ものすごくやりにくい。日本の教育は、学校教育の次に大事にしたのは、社会教育なんですね。戸畑がそうでした。北九州は、全国に発信するくらいの素晴らしい中身と施設を持っていた。谷市政の時には、やはり障害児のモデル宣言までやった。そういう素晴らしい歴史もあるのです。今、やりにくいのですね。これをどうにか、ひとつ教育委員会が考えなければならぬ大きな問題なのです。

それで、宮崎県小林市の教育委員会が、これは新聞情報ですが、要するに、スクールサポートセンターというのを作っているのですね。これは新聞に載っているから、皆さんもよくご存じだと思います。どういうことかということ、やはり先生たちに向き合う時間をできるだけたくさんあげたいと。そして、連携、親との連携も今は希薄です。向き合う時間も希薄です。私はじっくり、宿直があるときなどは男の子と一緒に寝たものです。しかし、やはり今、時間がない。気の毒なほど子どもと向き合っていないから、親もこういうふうになってきた。これは我々のやはり反省点なのです。親が悪いわけでは決してない。教育が素晴らしい面もあったが、やはりこういう面は抜けていたのではないかと。

それで小林市の教育委員会は、学級担任がしていた事務を事務職員が共同で処理する仕組みを作っている。やはり北九州も、もしかしたらそういうことをやっているのかもしれない。私が知らないだけかもしれませんが、できればやはり、ひとつこの辺りで、日本一というならば、そういう面についても、ぜひひとつご配慮をお願いしたい。

以上です。

委員： 偶然なのですけれども、管理職の募集をしたところ、小学校の校長先生を経験されて退職された方がうちの会社に入ってこられたのです。県外の会社のほうなのですが、それで、実は今、僕はこういう仕事をしているんだということで、校長先生という言い方をしたのですが、今、教育で一番何が欠落していますかという話をしたのです。

1 つは、これがポイントだと思いますといったのが、父親の存在感がない家庭、

おやじさんの影が薄い家庭の子どもほど、凶悪な犯罪と言いますか、非行にはしりやすいというのが肌で感じましたというのが、その方のお話しでした。

いろいろお話しをしていくのですけれども、先ほどの人の問題、予算の問題の話になりますけれども、では、うちの会社の仕事の中での話になるとどうしてもその辺のところ、職歴なのです。職歴、もう何十年もその仕事をしてきますと、私も何十年も社長をしていますと、その域から出てこれないのです。もう考え方がそういうふうに固まってしまっているのです。

先ほど、池田委員のこのレポートを見させていただいて、これを読みかえていても、やはり教育は人なりだろうと。人材の確保だろうと思うし、このレポートの中にありますように、「この人なら信頼できる！」「この人についていきたい！」という教師にどうしてつくっていくのかということところが、やはりテーマになってくるのではないだろうか。だから、教育と企業の方向性というのは、意外と変わっていないという気がしました。

現場の先生方が、今、ずっと言われています中で、一番必要としているのが子どもたちとの会話が欲しいというのが出ていますよね。

だから、その時間を作ってやる中で、例えば、今から10年前、20年前教師の現場でやられていた人たちが、今、何かの形で現場に帰ったときに、ものすごく雑用が多くなったような気がするのです。うちの会社でもそうなのですが、民間企業でもそうなのですが、10年前はこんな書類は作らなくてよかったことが、ものすごく多いのを作らなければならないような形になっています。うちは病院もやっていますけれど、ドクターもそう言われます。こんなことまでしなくてもよかったのにと、大学病院の先生方でも1回研究室に帰ったら下に降りることはなかったのだけど、また、その現場に、診療に降りていかなければならんということも求められることが多くなったということです。

もう何かこう、いろいろな問題をこう、押さえていく中でいろいろな書類を作っていくと言いますか、先ほど委員が言われたように、無駄な部分と言いますか、こんなこといいじゃないかということが、この10年、20年のうちにずっと増えてきたような気がするのです。教育委員会が求めている部分だろうと思いますし、これはまた、文科省のほうから来ていることだろうと思うのですけれども、必要以上に、現場の事情が分からずに、現場に書類を求めすぎるのが、僕は知らないのですけれども、そう思うのです。それが結局時間がなくなってくるといいですか、自分が子どもだったときに担任の先生とドッチボールしていたなということが、今ほとんどできなくなってきているのが現場の状態ではないかなということ、やはり何となく一大人としてそういうことを感じるがあります。

だから、我々と教師の現場の先生方とずっとこう、いろいろな話をしていくと、結構、最後のところでは合わないところがあると思うのですけれども、ただし、もう一つこれ、全く私の感性だけで言わせていただきますと、親の教育、学歴が昔と違って高くなってきたのです。私の父親は、学校の先生が言われると「ああ、そですか」というかたちで言っていたのですけれども、今、同じような学歴でいっているから、「あなたそう？」という感じで、どこの学校出たのなんていうことを、やはり親も思っているでしょうし、それでくると、言いたいことを言うてしまうというのですか、やはり、お願いすると言いますか、自分の子どもを預けてお願いしているという感覚が、ずれてきてしまっているというような部分の親が多くなってきているというのは、現実あると思うのです。だからそれをどう対応して

いくかということが、もっとう、現場の先生だけに任せずに、その辺のところの専門家が、各エリアの中、何校かの中に1人か2人アドバイスしてくれるような人が、各学校1人というわけにはいかないでしょうけれども、何人かの方々が家族との対応にいらっしやると、もっとう現場の先生も力が発揮できるのではないかなと、そういうふうに思いました。

座長： 非常に重要な中身で、ちょっと時間がたちすぎているのですが、今日の段階での意見をお聞きしても、優れた教員を増やして、教員のモチベーションを高めるためにどのような評価を行い、表彰や処遇をどのように行うべきかということ、全体として投げかけられましたけれども、ご意見を聞いていると、評価や表彰や処遇ではない、むしろ優れた教員が増えたり、教員のモチベーションを高めるためには、やはり子どもと向き合う時間を、きちっと確保できるのかどうかではないかなと思います。

給料はほかのよりも少し高いとか、そういうことで幾つか教員採用試験が受かるなら、北九州の教員になるとは思わないと恐らく思いますので、やはり子どもときちっと向き合いたいという思いが、先ほどもデザインがやりたいから、ほかをやるならTOTOを辞めるという状況ではないでしょうけれども、やはり学校の先生はどちらかという子どもと向き合いたい、子どもの教育に自分がかかわりたいという思いで、やはり教職の道を歩んでいるからというふうに思いますので、やはり条件よりも、その時間をいかに確保してあげるのかが重要ではないかというふうに思います。

そういった観点からみると、先ほど、委員の比較の話でもありましたし、今のこの教職員の状況などを見ても、ひょっとすると少人数学級とか少人数教育というのは、ここでも盛んに出ていますけれど、これはむしろ理由にならないというか、教員が子どもと向き合う時間を確保するというか、これが重要であるとしたら、教員がやらないといけない実務ということがあれば、向き合うべき子どもの数は少なくなるので軽減されて、向き合う時間が絶対的になれば、教育としてやりがいも当然出てこないですし、保護者の立場からしても、自分の子どもとか一人ひとりの子どもときちっと向き合えたりできないというような状況があるのではないかなというふうに思います。

ですから、そう言った意味では、教員のこの多忙感というのは、絶対的な時間というだけではなくて、やはり、子どもにつながると思っているから、いろいろなこう、一応教員から見ると、雑務に見えるようなことをやっても、それがつながる前に保護者からクレームがあったり、子どもと気持ちのすれ違いがあったりすると、やはりこう頑張ってたどり着く前に、もう今日はみたいな教員がやはり多いのではないかなと思います。

ですから、そう言った意味では、先ほど1つ事例も紹介されましたけれども、教員の1人当たりの子どもの数よりは、教員がより子どもと向き合う時間を確保するための仕組み。例えば、事務処理を、教員が個人でやる部分をかなり、もう1回事務職員のほうでしていただくとか、あるいは私個人的に思うと、大学なんか、私なんか、教材を準備したり、授業の印刷をしてくれるような職員がいるので、これ何部お願いしますとかお願いして、やってもらっているのですけれど、その職員が忙しかったり、自分でやれということになったら、私の資料を準備しなくて、マイクだけで授業したりすることになると思うのです。

だからそういった意味では、こういう教材がある、こういう教育があるとかです。ね、こういう中身を印刷しておきますとか、こういうふうに分けておきましたとかというような、そういった教員の、一応ここでは雑務というふうに数えられるような部分を補助するような職員を、むしろ増やしたほうが、教員が例えば 35 名とか 40 名の違いにはかかわらず、40 名になっても向き合える時間になるのかなという感じも、ここでの議論の中身を見ても感じるような気がします。

ですからそういった意味では、どういうふうに教員の人材を確保するのかとか、数を増やすとか少人数教育というよりも、やはり教員が生きがいを持って子どもたちに向き合える時間を確保するために、その周辺の、例えばまあ、保護者の対応をする窓口を決めるという意見も出ましたけれど、そういった教員が子どもと向き合う以外の部分をできるだけ、ほかの方で対応できるなら、これができるような仕組みを少し考えていくということも必要なのかなというふうに思います。

そういったことも少し意識をしながら、学校の改革、全体のあり方だとかいうことも、次回、少し意識しながら議論できたらいいかなというふうに。今日、ちょっと時間がないので、皆さん方、言いたい意見も十分言えなかったかと思えますけれど、この意見については、また、改めてご意見を聞きたいというふうに思いますので、よろしく願いをいたします。

それで、ちょっと時間がないですけれど、議題の 3 つ目「子どもの学力、体力、特性を伸ばす学校教育のあり方について」を、次回の頭出しになりますけれど、資料を簡単に説明だけ、よろしく願います。

事務局： 簡単に説明をいたします。資料 3「子どもの学力、体力、特性を伸ばす学校教育のあり方について」をご覧ください。

今回お配りしたのは、次回会議の頭出しの資料でございます。次回会議では、「子どもの学力、体力、特性を伸ばす学校教育のあり方について」を検討していただきたいと考えております。

そこで、専科教育や小中連携等一貫的教育について、他都市での取り組み状況と本市での取り組み状況の比較や、実施上の課題などをまとめております。

申し訳ございません。時間もだいぶオーバーしている関係で説明につきましては、資料を配布という形に変えさせていただきたいと思っております。

よろしく願いをいたします。

座長： 資料の中では、品川区の小中一貫教育の考え方という形で紹介されていますけれど、私も確認したのですが、例えば、北九州で小中一貫教育に切り替えたいので、これについて審議してもらいたいとかいうのではなく、そういうユニークないろいろな取り組みが出ているという例示の一つとして紹介をされているということになりますので、まあ、学校の仕組みの問題、あるいは内容の問題、今日ちょっと出かけた教員のゆとりといいますか、教員がより教育に専念できるあり方についてということ意識しながら、次回、議論できればいいかなというふうに思っています。

併せて、皆さん方に最初お聞きしました教育日本一というものに関しても、少しずつ整理をしながら作業を進めていきたいというふうに思っております。

それでは、本日の議事はこれで終了したいというふうに思います。最後に事務局から連絡事項等があれば、よろしく願います。

事務局： 本日、長時間にわたるご議論、ありがとうございました。事務局から2点ご連絡いたします。

まず1点目、次回、第8回の会議の開催日程でございます。日程調整の結果、6月26日、木曜日14時30分、午後2時半から、場所は総合保健福祉センターアシストの2階を予定いたしております。今回と場所は異なりますので、よろしくお願いをいたします。

2点目でございます。次々回、第9回会議の日程調整につきましては、本日、日程調整表を、今、お配りしているところでございます。本日中にスケジュール等が確認できます委員の方は、お帰りの際に事務局のほうにご提出いただきまして、現段階でスケジュールが確認できない委員の方につきましては、後日、ファックス等でご返事いただければと思います。

事務局からの連絡事項は以上でございます。

座長： では次回、第8回会議は、6月26日木曜日、場所がここでもないですし、前回やった場所でもありません。総合保健福祉センターアシストの2階講堂にて行うということです。

それから第9回会議は改めて日程調整を行うということでした。委員の皆さま方は、7月のスケジュール等を教えていただければというふうに思います。

それではこれで、「第7回子どもの未来をひらく教育改革会議」をこれで閉会させていただきます。皆さま、ご協力ありがとうございました。